

くらしと教育をつなぐ

We

特集

女性と暴力

震災後の電話相談を通して見えてきたこと（正井礼子）、自助グループ「しんきょうたいむ」のとりみ（梶沢綾子）、性暴力について男が語るということ（小西正人）、人権先進国・カナダに学ぶ（安藤由紀）。
連載：母と娘の500日（森津純子）、フェンスを越えて（小平陽一）、蔦森樹の巡業日記、居場所考（水田宗子）他。

1996

女と男の家庭科新時代



女と男の対等な関係（セクシュアリティ）を創るために

SEXUAL HUMAN RIGHTS

年間購読料3000円（送料込み）／A5版・32ページ／年4回発行

いま「婦人保護事業」の窓口には、
男女間暴力、強姦などの性暴力、離婚、セクシャルハラスメントなど、
女性の人権侵害をめぐるさまざまな問題が寄せられています。
性差別の極限である売春問題を頂点として、
こうした状況はますます深刻化していると言わざるをえません。
男女平等社会を実現するためには、
「女性の人権」の視点を明確にした
社会福祉のバックアップがぜひとも必要です。
私たちの会誌「セクシュアル ヒューマン ライツ」は、
女性の人権の確立を願うあらゆる方々に参加していただき
性と人権、女性と福祉に関する論文、
現場からの声や問題提起、文献資料などを掲載し、
広く論議を起こしていきたいと願っています。

- ◎創刊号 「売春は労働か」をめぐる 加納実紀代
フェミニズムの彼方に 鹿野政直
- ◎第2号 「女性の身体の自己決定権」の根拠へ 金井淑子
賃金における統計的差別と法 山田省三
- ◎第3号 タイー人身売買に立ち向かう女たち 高瀬和子
民間女性シェルター調査報告書 桑島 薫
- ◎第4号 女性の人権と対等なセクシュアリティ 青木やよひ／丸本百合子／金住典子
「援助交際」という名の「性の自由化」の欺瞞 杉本貴代栄（以上、「シリーズ創論」より）

「女性福祉法」を考える会は、次のような活動をしています。

- ◎現行の「売春防止法」を名称、内容ともに改正する法案の検討
 - ◎「婦人保護事業」を女性の人権を確立する視点から発展させる
 - ◎女性と社会福祉の実態や現状と結びついた理論研究
 - ◎会誌「セクシュアル ヒューマン ライツ」の発行
 - ◎女性福祉情報ネットワークの実現
 - ◎シンポジウムや講演会などの開催
- 会誌購読者のみならず、
会の活動に積極的に関わる会員、
サポート会員も募集しています。
詳細は会までお問い合わせください。

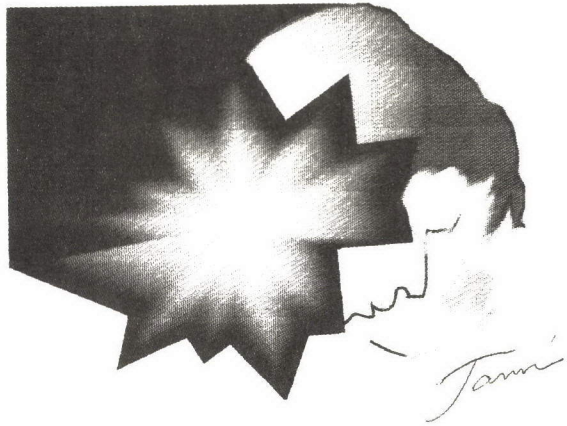
〒171 東京都豊島区西池袋 2-43-5 日神パレステージ西池袋 1102 「女性福祉法」を考える会
TEL.FAX 03-3590-5029 郵便振替00150-8-24973

くらしと健康をつなぐ

We

11月号

特集 女性と暴力



連
載

- シネマの魔 武田 秀夫.....30
- 閩都市建設計画 坂部 明浩.....34
- 変な子じゃないよね 滝野澤直子.....36
- 母と娘の500日 森津 純子.....38
- おんなが歳をとるということ 木村 栄40
- 蔦森樹の巡業日記 蔦森 樹55
- セックスレスなわたしたち 海野 俊之.....56
- 違いがわかるクリーミーな相談室 坤 恵依子.....58
- 神戸から 前田 圭子.....60
- 居場所考 水田 宗子.....61



- ◇ We夏季フォーラム実行委員会だより54
- ◇ 編集後記64

特集 女性と暴力

- ☆ 震災後の電話相談を通して見えてきたこと
「夫（恋人）からの暴力」 正井礼子…………… 4
- ☆ 自助グループ「しんこきゅうタイム」のとりくみ 裙沢綾子……………13
- ☆ 人権先進国・カナダに学ぶ 安藤由紀……………18
- ☆ 性暴力について男が語るということ 小西正人……………24

女と男の家庭科新時代

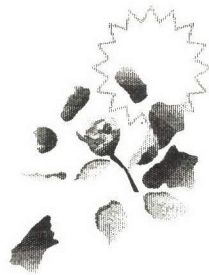
- 家庭科—風がかわる匂いかわる 入江 一恵……………42
—やあ！こんにちわ、神戸工業高校めぐり—
- フェンスを越えて 小平 陽一……………41
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎……………47
- 知りたい・知らせたい共学家庭科 芦谷 薫 ……………48
- 家庭科何はともあれHELPキー 寺島 絃子……………50

『心の地図』—私の場所を求めて
尾崎豊と中島みゆきの世界から（2）

震災後の電話相談を通して 見えてきたこと

「夫（恋人）からの暴力」

正井礼子（ウイメンズネット・こうべ）



「私たちの家」をオープンして

ドメスティックバイオレンスという言葉をご存じだろうか。直訳すれば家庭内暴力だが、いわゆる子どもから親への暴力ではない。夫（恋人）から妻への暴力をさす。

実はこの問題にかかわるきっかけは「私たちの家」を開いたことにある。「ウイメンズネット・こうべ」は、女性問題の学習会や本づくりなどの活動が続けていたが、活動を進める中で、元気な女性たちがたくさん見えてくる一方で、まだまだ家制度に縛られしんどい思いをしている女性たちも多いことに気づくようになった。そこで、女性も

っと本音を語れて元気になる場をつくろうと仲間と話しあう中から、一〇人のスタッフで家賃を出しあい一軒の家を借りることになったのは、九四年の春のことだった。

「私たちの家」のオープンが新聞に掲載されるや、電話が一週間鳴りっぱなしになった。「実家のない私に実家があったかい」「一度大の字になって昼寝がしたい」「遠くに行けないけれど、そんな家があるだけで元気になれる」など……嬉しいという電話が関西一円から入った。「女、三界に家なし」なんて古い諺がいまだに生きていたのだ。女性の時代なんて言っても「自分名義の家」を持っている女性が何人いるだろう。まだまだ遠慮して暮らしている人が

多いんだなあと思った。

その後、さらに驚いたのは「暴力」に苦しむ女性たちからの電話がかかってくることだった。特に電話相談を開いているわけでもなかったのに、年齢や階層を問わずさまざまなケースの電話があった。「ひとまずここへ逃げて来てほしいよ」と言いたかった。しかし、宿泊は家主の事情で受けられないため、弁護士や福祉事務所、県の婦人相談センターなどを紹介するしかなかった。

ある土曜の午後、「お母さんが殺される」という娘さんからの電話が入り、福祉事務所は閉まっていたので県の婦人相談センターを紹介した。心配になって後日婦人相談センターに経過を尋ねると、「警察へ行くように言った。ここは売春防止法に基づいてやっている。主婦の駆け込み寺ではない。ボランティアでやっているのではない」との男性の所長の返事だった。あまりの対応の冷たさに、県に「今後をせめて女性の所長を配置してもらいたい」との旨を告げた（現在、婦人相談センターの所長は女性になり、夫婦間暴力にも積極的に取り組むようになった）。

その後、「女たちの家」として、神戸市内に古いけれどかなり大きな家を提供してくださる方が見つかり、十二月に引っ越しをした。5DKで風呂もあり、一〇組の布団を

用意して、誰が来ても泊まれる準備を整えた。準備中に既に三組の女性が「女たちの家」を訪れた。

一組は三人の子連れの主婦であり、クリスマス前まで一〇日ほど滞在した。夫の暴力から逃れてきた人で、小学生の子どもが自分の通帳を握りしめていた以外に所持金がなかった。仕事をしていたことを理由に、「働く女は生意気だ」といつも夫から怒鳴られ、姑からも同様の言葉を浴びせられ、すっかり自信を失い、何度か鬱病にもなったと言う。「あなたは悪くない」という私たちの言葉に、「お世辞ではないですか」と何度も聞き返していた。夫と離れてゆったりした生活が出来たことで、ようやく弁護士在所へ相談に行く気になったとのことだったが、自分に自信が持てないためか、再就職はうまくいかなかった。

彼女たちの自立を支えるためには、安心できるスペースと共にカウンセリングが必要だと思った。長年にわたる暴力（言葉の暴力も）で受けた傷は簡単には癒せない。時間をかけた精神的なサポートが必要だと思う。

あとの二組の女性たちも、「この家があれば、卑屈にならず夫と話し合いができる」と言って帰っていった。

ささやかながらシェルターとしての活動もスタートできそうだと、九五年一月二三日を新しい家のオープンの日と

決めた。そして「女が一人で生きること」をテーマに、お鍋を囲みながら思いっきり話そうね、と楽しみにしていたところへ、一月一七日の阪神大震災である。激震地にあった家のはかろうじて建物だけは残ったが、周囲の土地が崩れてしまい危険なため、現在は閉鎖中である。

震災後、こんな時にこそ「女たちの家」が使用できたらと何度思ったか知れない。

女性のための電話相談を始めて見えてきたもの

震災後一週間たった頃から、私の自宅に、グループのメンバーから、「避難所にいるお爺さんやお婆さんを怒鳴りちらしている」「被災した姑と同居したが、嫁は世話するのが当然とこき使われる」「震災前から暴力的だった夫がさらにひどくなった」「離婚をためらっていたが、震災で一度っきりの命だと思ったら、ようやく決意できた」など、さまざまな電話が入るようになった。それは、マスコミが連日のように伝えていた、家族の愛情や絆が深まったという風景とは異なるものだった。

その頃、障害者や高齢者の支援ネットワークはあったが、女性のための支援ネットワークはなかった。

女性への支援はいつも後回しになる。それなら私たちでつくりうと、女性支援ネットワークを立ち上げたのは二月半ばだった。物資の配布をしたり、女性が本音で語れる集會を何度か開いた。そして、電話相談を開設したのは三月に入ってからだ。最初は、フェミニストカウンセラーの井上摩耶子さんから、電話相談を受ける心がまえのようなのを教えていただいた。以来、女性の立場に立ち、聴くことに徹することを原則にやっている。その後も、「心のケアプロジェクト」の支援を受けながら活動を続けた。件数が減った頃から、私たち「ウイメンズネット・こうべ」の仲間たちだけで週二回活動し、二年目からは、週一回のペースで、六人ほどのボランティアスタッフが交代で電話相談を続けている。

九五年三月から九六年六月までの相談件数は一三七件。その内、パートナーとの関係についての相談は九〇件で、全体の六六%。当初は震災関連の電話が多かったが、半年ぐらい過ぎてからは、日常的に存在する夫婦関係の悩みが主になった。

「震災とは関連なくても聞いてもらえますか」と、遠慮がちに電話がかかってくる。夫との関係がしんどい人、家庭内離婚が長年続いている人、夫が妻子に全く関心をもたな

いという人、セックスレス、そして夫からの暴力。

具体的に離婚したいという相談は三七件だった。夫からの暴力の訴えは二二件（相談全体の一六％、パートナーとの悩みの内の二四％）あったが、こちらからは暴力の有無は聞かないので、夫婦関係の破綻した家庭では、例えば夫の愛人問題を責める妻を夫が殴るといった場合など、夫からの暴力の比率はもっとあるように思う。

男らしさの刷り込みの強い男性ほど女性を殴り、女性もまた女らしさに縛られた人ほど自分を被害者と認識しにくいように感じる。夫からの暴力の問題はほんとうに深刻であるが、多くの女性たちがこのことを恥として沈黙してきたため、諸外国に比べて日本では対策が遅れている。

暴力に関する相談電話の傾向

暴力に関する電話相談には、次のような傾向がみられた。

- 一、年齢は二〇代から六〇代までさまざま。長年にわたる暴力が多い。相談時間帯のせいもか専業主婦が多い。
- 二、言葉の暴力——お前は何をしてんだ。皆殺しにしよう。家に火をつけてやる。

肉体的暴力——椅子をこわす。物を投げる。つばをかける。鼓膜を破る。殴る。骨折させる。首をしめる。火

のついた煙草を投げつける。髪を挿んで引きずりまわす。妻が逃げ込んだ実家の父親を殴る。

暴力は長期にわたるものが多い。だんだんエスカレーターしている。

三、殴られる側が自分も悪いと思っている。ひどい暴力にあっているのに（加害者が問題にされるべきなのに）、「殴られる私も悪いのです」「殴る夫と別れたいと思うこんな私はわがままですか」と自分を責める。

ひどい暴力の訴えはあるが、離婚を決意している人は少ない。娘が結婚するまで我慢するとか、離婚はしたいが離婚できないと諦めている。家庭内別居をしている。

四、専業主婦で経済力を持っていない。出ていけば住む家がない。特に被災地の場合、自宅も実家も全壊のケースも。

五、暴力に怯えて、離婚のエネルギーがでてこない。精神的に鬱的になっている。

暴力的な家庭に育ち、夫婦関係とはこんなもんだと思っている。もともと結婚に期待していない。「しんぼうせい、しんぼうせい」という母親の呪文に縛られる。

六、話せる人が周囲にいない。地方から出てきた人や、友人関係の少ない人が多い。人間関係が孤立させられてい

る場合が多く、援助の手が届きにくい。

今後の課題

◎「シェルター」の設置

「震災で家が全焼したため、夫の実家に避難している」「幼い子どもの前でも毎日のように夫に殴られる」「実家も全壊で両親は仮設にいるため、逃げ場がない」……そんな母親の声を耳にして、こんなケースが被災地では多いのではないかと心配する。

こんな災害時にこそ、地域にいつでも受入れ可能な「シェルター」が必要だとつくづく感じた。

日常的に暴力を受けてきた女性が、安全な場所で食事や生活が営めて、また精神的なサポートも受けられて、ようやく自分の将来をじっくり考える余裕ももててくる。

「女性への暴力」は世界的な問題であり、北京会議でも重要課題であった。最近策定された伊丹市の女性行動計画には「シェルター」の設置が記載されている。北京会議で採択された行動綱領を踏まえたものと考えられるが、今後改定される各市の女性行動計画にもぜひ組み入れられるよう期待したい。アメリカには既に一二〇〇カ所の民間シェルターがあり、ドイツにも各都市に数カ所のシェルターがあ

る。いずれも運営は民間に任せ、資金は行政や財団からの支援がある。

◎女性と住宅問題

イギリスでは、暴力から逃げてきた女性たちに、まず住宅の提供とカウンセリングがある。日本の場合、母子家庭やシングルの女性にとって住宅取得はかなり厳しい。

震災で明らかになったことは、日本の女性の賃金が男性の半分であることの不合理だった。それがパート労働者の大量解雇や、高齢女性の貧困につながった（女性が男性より千人多く亡くなっている）。賃金は男性の半分なのに、家賃は男女平等。住宅取得は女性たちにとって困難かつ深刻な問題である。被災者にとって衣食住のうち衣と食はどうにかなるが、住は個人の力ではどうにもならない。これは震災で痛感したことである。

結婚してもしなくても、子どもがいてもいなくても、一人でも安心して暮らせる社会環境の整備が急がれる。例えば、シングル女性の女性であっても公営住宅に住めるような住宅政策など。男性の庇護の下にいらなくても女性たちが安心して暮らせるような社会であってほしい。

◎公的機関の積極的取り組み

神戸の場合、ある民間の母子寮が全壊し五人が亡くなっ

た。かなり老朽化した建物だったと聞く。震災後、彼女たちが避難している神戸市立ひよどり母子寮を訪ねたが、そこも、よく壊れなかったと思うような古い建物だった。四畳半一間に大家族が同居条件。子どもが三人いたらどうなるのだろうと思っていたら、六人家族が空きを待っているとのことだった。女性にとって最後の砦ともいえる母子寮がこれでは貧しすぎる。

神戸では、婦人相談センターや母子寮など行政の施設における緊急一時保護を行っているが、その期間も現在の二週間程度からもっと延長してもらいたい。母子寮は、原則としては離婚をしているか調停中、少なくとも離婚の意思が固いことが入所の要件のようだが、ひどい暴力を振るわれていても離婚を決意できず、その気力すら失ってしまっている人も多いため、落ちつくまでには一〜二カ月が必要ではないかと思われるからだ。また、神戸市ではシングル女性の母子寮に一時保護されているが、同居はできない。女が一人前に扱われないことが悲しい。ケースによって、実家に帰るよう勧められるようだが、男性には何か問題があっても実家に帰るように勧めないだろう。さまざまなき事情があって、実家にも帰れず夫のもとに留まっている女性も多く、福祉事務所においては、暴力からの救済を願

う女性は既婚、未婚、離婚の意思の有無を問わず、ひとまず保護してもらいたい。

警察も、たとえ何針も縫うような傷害事件（尼崎市のケース）であっても、夫婦間暴力に関しては、民事不介入を楯になかなか動いてくれないのが現状である。この点に関しては、本年六月、神戸弁護士会の問い合わせに対して、兵庫県警は「通報、要請があれば、すぐかけつけ暴力行為をやめさせる。ケガの程度によっては夫に傷害罪の適用も考える。夫婦間暴力に対応し、措置をとっている」との回答があったので、今後は女性警官を同行させるなどの積極的な取り組みが望まれる。

◎女性への「暴力禁止法」「女性福祉法」などの制定

私はつい最近まで、母子寮が児童福祉法に基づく施設で、子どもの保護を目的として母子が入所できる施設、ということを知らなかつた。そのため、子どものいない女性を主に保護する施設は、婦人保護事業に基づく婦人保護施設だけなのが実状だが、行革のあおりを受けて、今やその相談窓口である婦人相談員の存続すら危うい気配である。

女性への暴力を禁止する法律や、「女性の人権」の視点を明確にした新しい「女性福祉法」の制定が求められている。そのためにも、行政には暴力に対する実態調査をせむ

お願いしたい。

◎女性への暴力が人権侵害であるという社会的認識を

堺市の人権意識調査の結果報告（第三回堺市人権意識調査／調査期間 一九九四年九月二七日～一〇月一四日／対象 市民一六歳以上六〇〇〇人と人権教育推進協議会の構成員一〇七五人／回収率 五六・七％）によると、一〇人に一人以上の妻が夫からの暴力を体験し、二〇人に一人以上の妻が配偶者から性暴力を受けたと感じているという結果が出ています。

性暴力に関しては、日本の中絶の八割が三〇代～四〇代の主婦という数字から考えると、避妊しないことも妻の側が夫の性暴力と認識できたらもっと数字は高くなるだろう。この調査から、「夫からの暴力」は決して特殊な家庭の問題ではないということがわかる。社会の多くの男性が家庭という密室の中で、暴力をふるっている現実があるということだ。年齢や社会的階層を問わず、多くの女性たちの問題であり、同時に男たちの問題でもある。

このような調査を各地方自治体で、今後ぜひ実施してもらいたい。その結果からさまざまな具体的施策も生まれてくるだろう。

子ども虐待ホットラインの相談員をする方が、子どもへ

の虐待の相談から、女性への暴力が見えてきたと話された。自分が殴られるのは我慢できても、子どもが殴られることに耐えられなくて電話をかけてくる。あなたも被害者ではないかと聞かれて初めて話し出すそうだ。

妻を殴る夫の六割が子どもも殴る、という報告がある。彼女たちが自分のことを黙ってきたのは、夫婦関係とはそもそも暴力的なものだという認識を持っていたり、殴られる自分が悪いと思っていたり、恥ずかしいことだと思っていたり、彼女たち自身がそのような暴力的な環境で育ってきたりといったケースが多いようだ。

ある集会で、私が夫婦間の暴力の話をした時に、「自分の周囲に夫から殴られるような人はいない」「殴られる女性には男性とのコミュニケーションの仕方が下手な人だ」「男性は社会的にストレスが多い。それを理解しないからだ」などといった非難めいた声女性があがった。被害者が非難され、加害者が擁護されるなんて納得できない。これは性暴力の問題と根っこが同じだと思った。

「殴られるような人はいない」と言う、そんな人の前では決して誰も本当のことを語らないだろう。

相談の中でも、「こんな目にあうのは自分だけだと思っていた」という声があった。暴力は愛情表現とさえ言われ

ることもあり、自分を被害者とは認めにくい。また、夫の社会的地位が高い場合、周囲から信じてもらえなかったりするもので、なかなか暴力の実態が経験のない人へ伝わりにくい……というのが実状のようだ。

女性への暴力は、当事者がなかなか語りにくい問題である。だからこそ、語っていかなくてはいけないのだ。「あなたが悪いのではない。あなた個人の問題ではない」と。

女性の力で社会を変えよう

相談電話をかけてくる女性たちの中には、ノーと言いにくかったり、自分に自信が持てない、他の人間関係も苦手、自分を好きになれない、そんな人が多かった。四〇代になっても母親から自立できない女性や、子ども時代に親が怖くてなかなか物が言えなかった、他人が怖い、そんな人も何人かいた。それは働いている女性であっても同様だ。

暴力への一つの対策として、女性だけでなく男性もアサーティブトレーニング（上手に自己主張する訓練）やコミュニケーションの方法を、学校教育や生涯教育のひとつとして学ぶことが必要ではないかと思った。日常生活の中ではっきりノーと言えたり、自分の気持ちを正直に伝えるこ

とが出来るとなれば、きっと自分に自信を持てるし、自分を好きになれるだろう。そのことが、暴力から女性を守る力になるし、暴力をふるう男性も変えていくと思うのは甘すぎるだろうか。

最後に、女性への暴力は男性支配の社会構造を反映している。夫の暴力から逃れられない大きな理由は、やはり経済力のなさである。育児や介護の社会化をすすめて、女性が仕事を手放さなくていいような社会システムをつくっていくことが必要だ。そのためにも、社会の政策決定の場にもっと多くの女性たちを送っていくことが重要な課題であると考えている。

性暴力に対する一部マスコミの報道に関して

被災地でレイプが多発したことを私たちが伝えたことに関して、一部のマスコミから、「レイプはなかった」かのように、それに関わった女性たちを中傷し、揶揄するような記事が掲載された（『諸君』文芸春秋社発行 九六年八月〈神戸「被災地レイプ多発」伝説の作られ方〉与那原恵）この記事からレイプを生む社会構造そのものに深く考えさせられた。

レイプという事件は被害者の多くが女性であるから、男性優位の社会の中では、いつもなかったことにされてきたのだ。ところが「性暴力を許さない」という集会を三月に開いて、男性が力で支配する社会の有り様に断固、抗議した女たちに対して、ペンという暴力でバッシングにかかったのだ。ライター自身は、「レイプの被害者が現れない」ことに疑問を持ったと書いているが、それこそレイプに関する想像力を欠いたものである。加害者に甘く、被害者に厳しい現在の法システムでは、自分に落ち度があったのではないかと自分を責めざるを得ないし、警察やマスコミによるセカンドレイプも恐れる。被害者が訴えにくいことが、レイプ被害の大きな問題なのだ。

私自身もずいぶんしんどかった。犯罪者のように自分の名前を呼び捨てにされる。女たちの精いっぱい思いや運動を揶揄し握り潰そうとする。記事を信じる人もいると思うと悔しかった。抗議すべきだという声も多かった。しかし、相手はマスコミであり、レイプ事件を「でっちあげ」としたい側の人たちに、「証拠」（彼らにとっては被害者の存在だけであろう）をだせない私たちが何を持って戦えるのか。性犯罪の問題の難しさをほんとうに身を持って感じた。正直言って、抗議してさらに自分を傷つけられるこ

とも恐れた。抗議すべきだという周囲の声すら辛かった。闘える人とそう出来ない人、人はさまざま。

暴力は人からパワーを奪う。時間がたてば闘えるようになる場合もあるだろう。私も心が回復するのに時間がかかった。今でもマスコミを怖いと思う。暴力を受けた者の気持ちのいくばくかを味わったような気がする。レイプの問題に関わっただけで、これ程までにマスコミに攻撃のターゲットとされるのだ。性被害の問題の根の深さを思った。

今度の経験から私が実感できたことは、被害者が闘う元気を回復するには時間がかかること。被害者にとってまず自分の言葉を信じてもらえることが、癒しの一歩であること。本人のプライバシーが徹底して守られること。本人がどうしたいのかじっくり聞いてあげること。裁判をしたいのか、それとも心の傷を癒したいのか、周囲の人が本人の気持ちに添うことの大事さを知った。

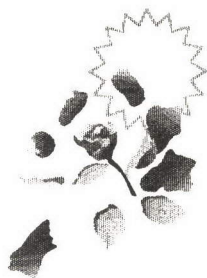
性暴力はどこでも日常的にある。警察に報告されたものだけで年間一五〇〇件ものレイプがおこっている。沖縄でも被災地神戸でも。

「性暴力は一件でもあってはならない」、それが私たち女性の思いである。一人一人が、自分の問題として取り組み、性暴力のない社会をつくっていききたい。

自助グループ

「しんこきゆうタイム」のとりくみ

裾沢綾子（女性のための離婚ホットライン）



女性のための離婚ホットライン

離婚したくても、身内や友人に離婚の悪い面ばかり強調されて何年も我慢を強いられている人、鬱々と暮らすうちに心を病んでしまう人……そんな人の受け皿がないよね、と仙台在住のフェミニスト二人が言い出したのが一九八九年の暮れのこと。その二人の呼びかけに、弁護士、自然食レストランのオーナー、助産婦、保健婦、公務員、会社員、主婦、などが集まり、離婚経験者を含む約一五名で「女性のための離婚ホットライン」が発足した。

翌九〇年六月に第一回のホットラインを実施した。期間

は二日間、各午前一〇時から午後四時までで、面談は各日も午後のみ。最初の相談日は大反響で、一〇時前から電話が鳴りっぱなしだった。結局二日間で、電話相談八〇件、面談四七件の、合計一二七件もの相談が寄せられた。同年一二月に第二回を実施し、以来、年二回（六月と一二月）、各二日というスタイルは定着し、今年で六年になる。

離婚ホットラインに相談してくる人の多くが、「何をどう整理して考えたらいいのか分からない」「離婚後の生活も何も想像がつかない」ので、現在の悲惨な生活状態を受け入れざるを得ないという状況であった。また、なかには「自分がどうしたいのか」が分からないまま、弁護士や公

的窓口相談に行き、うまく質問できないために無用に傷
ついている人も見られた。

そこで、まず気持ちを整理するために同じ悩みを持つ人
たちで話をしあう場が必要なのではないかということが、
ホットラインの中で提起され、九三年秋に参加者が自分を
語ることに重きを置いたセミナーを開いたところ、三〇名
を越える参加があった。

一〇名程度のグループを三つ作り、スタッフが二名ずつ
進行役として入ったが、この「質問&回答による相談会で
はない」各人の気持ちの整理のための話し合い、という会
の趣旨は大成功で、涙を流して語る人、うなずいて聴き入
る人、他の参加者の話の中に自分と同じ課題を見つける人。
互いに共感しあい、皆何かを掴んで帰ったように思われた。
これが「しんこきゅうタイム」のはじまりだった。

「しんこきゅうタイム」のルール

一、プライバシーを守る

本名を名乗る必要はない。会で耳にした話は他で口外し
ない。スタッフも進行のためにメモは取るが、公開はしな
いことを話し、秘密厳守を全員で毎回確認する。

二、開始時間を守る

途中で遅れた人が入ってくると、話をしている人の気持
ちが乱れるし、聴いている側も集中できない。開始三〇分
後に、途中入場不可である旨と、次回の予定を書いたメ
モを張って、断ることにした。ただし、仕事や遠方からの
参加でやむを得ない場合は事前に連絡を入れてもらうこと
で許可するなど、このルールは緩やかに運行している

三、当事者のみの参加とする

本人に付き添った友人などは、問題の深刻さが違い、指
図的発言が出たりするので断っている。また、育児情報誌、
新聞などのマスコミ、公的相談窓口などから見学参加の申
し出もあったが、プライバシー保護の観点と、実際に参加
者が嫌がっていることから一切断っている。

四、参加の理由など、必ず自分のことを話す

その場の当事者としての意識を持ってもらうために、初
めにスタッフも参加者も、簡単な自己紹介をする。

「今日は皆様のお話だけ伺いたいと思っております」「皆
様に比べてわたしはまだまだ大したことありません」的
発言で、自分を語るのを拒否する女性がいると、「話を聴
いていくだけの人が、本当にここで聴いた秘密を厳守でき
るのか」と他の参加者を不安にさせるので、必ず自分のこ
とや自分の気持ちを話してもらうようにする。

いずれ、調停委員の前や役所窓口で、自分で交渉していかねばならなくなるから、むしろ積極的にこれを練習の機会にしよう。

五、批判的発言、押しつけがましい助言はしない

参加者は「そんな甘い考えでは暮らしてゆけない」「せっかく縁あって夫婦になったんだから」と、親兄弟、調停委員や弁護士、公的相談窓口や宗教家に言われ続けてきた人たちである。「あなたのためを思って」と言いながら実際には「女は我慢すべき」という価値観の押しつけは、ここではなしにして、「離婚を選ぶことがあなたにはできるんだよ」という雰囲気を作っていきたい。

六、その他

参加費を五百円にしているので、毎回一〇〜一二名程度の参加者があるので、六〇〇〇円程度の収入となる。会場費が一五〇〇円〜五〇〇〇円なので、少しずつ余剰金が貯まってきているので、離婚と子ども、夫の暴力に関する本など参加者への貸し出し用の本の購入、スタッフの研修用のニューズレターの定期購読などに当てている。これらの購読により、スタッフは、参加者に力を還元していけると考えている。

「自助グループ」と「サポートグループ」

しんきゅうタイム開設当初、「自助グループ」であることを最優先に、参加者の発言に対しスタッフ側が「助言をしない」ようにしていた。これは、カウンセラーの基本的態度である「非指示的であること」を考慮に入れてのことであった。しかし、この「スタッフが助言をしない」とことが必ずしもいいことではないことが分かってきた。

参加者は、しんきゅうタイムに辿り着くまでの夫との長い葛藤の中で疲れはて、また、夫や周囲からの非難の中で自信を失ってきている。だから「主婦は何ていっても非力よね」「世間は離婚に冷たく、子供の将来も危うい」といったネガティブ(否定的)な発言があると、その発言が場の雰囲気を作ってしまう。そこで、スタッフは、積極的に離婚に対するプラスの情報を発信し、ポジティブ(肯定的)な雰囲気を作っていくことが必要になってくる。

参加者が傷ついてきた体験をフェミニズム的視点で捉え直し、「あなたは悪くない」というメッセージを伝える。参加者が生活に困窮しているのであれば、それを楽にする手だて―福祉制度の利用などを紹介する。

積極的に参加者のエンパワーメントをする。積極的にエ

ン。パワーメントを行うことで、結婚生活が上手くいかなかったことで自分を責めていた人が、会を重ねる中で、自分が不当に扱われてきたことに気づき、怒り出す。自分とパートナーとは別人格であり、別人格からあまりに理不尽なことをされてきたことを認識するのである。そして怒りの表明を、他の参加者から支持してもらうことで、自信が回復してくる。

しんこきゅうタイムの卒業生（しんこきゅうタイムに参加しながら離婚を経た人）も参加して、渦中にいる人に元気を与え、その人自身もまたもう一度自分を振り返ることで自分の選択の正しさを再確認している。

スタッフが、しんこきゅうタイム以外にしているサポート活動

一、スタッフのうち二人のメンバーの電話番号を公開し、次の会（一月に一回）まで待てない緊急の場合、五〇〇〇分程度、電話での相談に応じている。

二、夫の暴力から逃れて来た人に宿を提供する。ただし、しんこきゅうタイムに参加して、関係ができ、顔見知りの関係の中においてのみ。スタッフ二名は、いざという時はタクシー着払いで逃げてきていいと申し出ている

（アメリカで言うセルフホームにあたる）。二〜三泊を提供した後、公的施設につなぐつもりである。

三、求職情報の提供。

サポート活動を行っていく上で大切なのは、「無理はない」ということである。例えば公開した番号に電話がかかってきたとき、手が放せない状況だつてあり得るし、延々と話をされて困ることもある。その場合、きちつとその旨を告げることで、スタッフ自身が「自己犠牲」の見本とならないようにする。グループの参加者たちは、それまでの生活のなかで「誰かのために我慢すること」を強いられ、それを学習してきた人たちが多いわけで、ここにきてまたスタッフが「参加者のために我慢するモデル」となつてはいけない。「我慢しあわなくてもやっていける」「関係を示すべきである」と思っている。

私がホットラインに関わったきっかけ&思うこと

離婚の直接の当事者でない私がなぜホットラインに関わっているのか。フェミニズムの勉強だけでなく困っている人を実際に援助したいと考えていたこと、問題を抱えて困

っている女性は、彼女の心（内面）を整理するのも大切な
のかもしれないけれど、もっと多面的な援助（具体的な生
活方法のアドバイスなど）も必要だと思っていたこと、心
の問題として彼女の中だけで解決するのではなく、社会問
題化していくことも大切だと考えていた私には、離婚ホッ
トラインはびったりの活動の場だったのだ。

離婚はいわゆる女性問題とされる項目の全てが関連して
くる。ひどい暴力をふるう夫だとしても、そこを出て行く
ことができないのは、彼女が離婚後の生活費の目途がた
ないからかもしれないし、辛抱が足りないし周囲から責め
られたくないからかもしれない。このように、男女の賃金
格差や雇用機会の不平等、年金や社会保険・税金のシステ
ムの家族主義、母子家族への福祉の不十分さ、女性に従順
と忍耐を強いる文化など、離婚にはあらゆることが絡んで
くる。これら社会システムの不平等に対し、メンバーや相
談者と一緒に悔しい思いをしたり怒ったりするのが好きだ。
怒りの場面を共有することで、思いがけない抜け道や対処
法を発見するのはとても楽しい。

しんこきゅうタイムに集う人たちも、初めはどうしてい
いかわからないといったうちひしがれた表情でやってくる。
それが回を重ねるうちに、自分が夫や世間・社会からいか

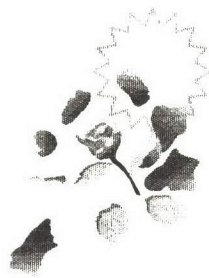
に不当な仕打ちをされてきたのか分かるようになり、怒り
を自覚し始める。その怒りはエネルギーとなり、福祉窓口
に対して粘り強い交渉ができるようになっていった具合に、
具体的な力となっていく。この過程につきあうのが私やメ
ンバーは好きだ。嬉しくなるし、こちらが力をもらう感じ
がする。これが活動を続けていけるエネルギー源だと思う。

ホットラインは各メンバーがやりたいことやエネルギー
があるときに勝手に催事を企画し運営するというシステム
を続けてきたが、全体で取り組むには趣旨が違うアイディ
アをメンバーが持つことだってあり得る。私はホットライ
ンの仲間の一人と共に「働く女性のグループDAPPLE」
という情報発信が中心のグループを立ち上げ『仙台OL文
句本』や『離婚サバイバーの本』を自费出版し、インター
ネット上にホームページを公開した。（<http://www.stf.tn.or.jp/~shiko/>）
<http://www.asahinet.or.jp/~AY8A-GMZW>）

『離婚サバイバーの本』はお薦めです。気持ちを整理しながら必
要な情報が得られるようになっていくワークブックで、ユーモア
のセンスが抜群。高校の授業の教材にも使えます。一冊送料込み
で一四七〇円。お申し込みは編集部まで。

人権先進国・カナダに学ぶ

安藤由紀（グループCAP）



「大学の実習で、性的虐待のカウンセリングの様子をミラーガラス越しに見てきて、驚いたんだよ。いやあ、カウンセラーが、手を取って泣いたりもするんだよね。バンクーバーでは——」。

もう三年前になるでしょうか。長野看護大学助教授の北山さんが、性的虐待のカウンセリングは、バンクーバーでは最もポピュラーな課題だという話をしてくれた時、もしかしたら探していたものに巡りあえたのでは、という予感がしたのは。

私は、性的虐待にあいながら成人になった女性たちと、たとえば体験はなくても、そのことに対して自分の問題とし

て向き合っていこうとしている女性たちが作る、ある自助グループにかかわっていたのですが、その頃、会は、癒しの確かなメソッドを模索していて、私はその中でクロウズド・グループのファシリテーターをしていました。

カナダで「性的虐待の治療を学ぶ研修」に参加してみたという思いを抱えながらも、九五年の夏は参加者が定員に満たずに研修は流れ、ようやく九六年八月、ブリテイッシュ・コロンビア大学助教授である石山一舟氏のコーディネートのもとに、大学院生石井えりさんに通訳の助けを借りた研修が実現し、一七名が参加しました。

グループCAPの立ち上げ

今どき、性的に不快な体験をしていない女性などいるのでしょうか。

職場での性的なからかい、夜道を歩いていてる時の言い知れぬ不安は言うに及ばず、親から性差別的な発言をされたことなど、「女の子」であるがゆえに行動から言葉にいたるまで制限されてきたことは、枚挙にいとまなく、ほとんどの女性たちは、程度の差こそあれ、なんらかの形で不快な体験をしてきていることは明らかです。

北米では、就学前から成人までの女性のうちの三人から四人に一人、男性の六人から九人に一人の割合で、何らかの性的な被害にあっているという確かな検証がなされていて、そのことは既に社会通念として認められています。日本でも、一九九四年に財団法人「日本性教育協会」が全国八三校の中学、高校と、大学生四九四四人に行った面接調査によると、女子の五五%、男子の一九%がなんらかの性的被害を受けているという結果が出ています。これは、日本では性的虐待に関する社会的な認識が低いので、軽度のものが蔓延しているということかもしれません。

性的虐待は特に子どものときに、また近親者によってなされた場合ほど、根底的な人間不信を伴う魂の深いレベル

での後遺症を残します——思い出すことが辛いために、犬に嘔まれたと思つて忘れようとか、お嫁にいけなくなるから人に言つてはならないとか、社会全体がその問題の発現を押さえ込み、治療方法を研究することはおろか、日本では、常にないもののようにしてきた難解な問題です。

私はそうした性的虐待の防止教育の必要性に駆られて、一九九四年に三人の仲間とともにグループCAPを立ち上げました。学校や地域の中で、啓蒙教育運動とCAP（*Child Assault Prevention*）を実演してきましたが、今までに七〇回ほど出向いた各地のPTAや職員研修の場で、「私にもそういう体験があります」と声をかけてくれる女性たちに必ずといっていいほどめぐり会ってきました。

フェミニズム思想とエンパワーメント

今回、カナダの治療施設の研修やカウンセラーの講義を受けた中で、私の確信は間違つてはいなかったと大いに励まされたもののひとつに、フェミニズム理論があります。

性的虐待をうけた女性、子ども、被害を受けた家族全員に対して無料でカウンセリングを行う「ヴィサック」という施設で長い間カウンセラーとして従事し、一度燃え尽きて事務職に変わって現場から遠のいたけれど、またカウンセ

セラールとして復職したという経歴のナオミさんが、五つの性的虐待の理論をあげて説明してくれましたが、彼女が最も重要な理論としてあげた第一番目が、性と暴力から女性の尊厳を守るという、フェミニズム理論だったのです。

アメリカでは一九六〇年代の公民権運動の流れをくんで女性解放運動が出てきたのですが、それがやがてレイプ・クライシス運動（強姦救援運動）となり大きなうねりとなってゆく過程で、心を癒す方法としてのさまざまスキルが生まれました。

相手の権利をそこなわず、自分の権利をうまく伝えるアサーティブ・トレーニング（AT）や、頭で分析して気づきを促進させるのではなく、まずは感情を解放して、辛い気持ちや怒りを表現するところから意識を広げていこうとするコンシャスネス・レイジング（CR）。そして、コウ・カウンセリングの名前で日本に広められてきたリ・エボリューション・カウンセリングなど、こうしたさまざまな運動の中から生まれ、女性、子ども、少数民族、障害をもつ人々、婚外子やシングルマザーなど、社会的に弱者とされてきた人たちに特別な学習を施すのではなく、その人のありのままの姿を認めて、「あなたはそのままでもOKなんだよ」と意思表示するのが、CAPの思想の中核であるエ

ンパワーメント哲学です。

あんしん・じしん・じゆう

CAPのロールプレイでは、子どもには「あんしん・じしん・じゆう」という大切な三つの権利があるのだという教え方をします。子どもが自発的に発言したり、知恵を出しあえるような場をつくり、ロールプレイに参加しなくなるような設定で、いじめや誘拐、性的虐待から逃れられる方法を提案していきます。

三つの権利が誰かに奪われてしまった時には、「いや」と言っただけでその場を逃げ、信じてくれそうな大人に相談に行くことを教えます。もしも相談した大人が自分の言うことを信じてくれなかった場合、信じてくれる人に会うまで話し続けることが大切だと言って励まします。そしてたとえ、親であろうと嫌がっている子どもを無理やり虐待するのは間違っていること、そんな時には、自分は感じたままを素直に「いや」といってもいい権利を持っていることを教えるのです。

子どもたち自身で、この方法を使って怖い場面を逃げきれた体験や、怖くても「いやだ！」と相手に言えたことで、子どもは自分の身を守れるのだという自信を自分のものに

します。子どもの自己尊重感を高め、危険な状況にあって
も切り抜けていく知識と自信を与えていくこと、人間に対
する基本的な信頼感をそこなわないこと、そうした子ども
たちがひとりでも多く増えていくことをめざしています。

多くの大人たちの知恵と愛情によって発案され、継続さ
れてきたCAPの歴史が背景に込められているこのプログ
ラムは、カリフォルニアでCAPスタッフとして長年働い
てきた森田ゆりさんによって日本に広められました。

クライシス・カウンセリング

「もし、あなたの子どもが、ある日学校から泣いて帰って
きたら、親としてのあなたはどのような態度をとるでしょ
うか?」。大抵の母親たちは、何があったのか心配して訊ね
ると答えてくれます。

「もし、あなたの子どもが女の子で、公園で夢中になって
遊ぶうちに遅くなって、見知らぬおじさんから痴漢行為を
され、泣きながら帰ってきたら、あなたはどのような言葉
かけますか?」。この質問には大抵の親から「だから言っ
たでしょ。早く帰ってこないあなたが悪い」と半ば叱りつ
ける言葉が帰ってきます。

私たちCAPのスタッフは、大人のための講演では、必

ず「性的な神話」の解説をします。まず、帰りが遅くなっ
たからといって、被害にあった子どもを責めて問題が解決
するだろうか。解決どころか、本当に非を負うべき人間へ
の追及をしていないのではないだろうか。追及まではでき
ないにしても、本当に悪い行為をしたのは見知らぬ人であ
って、被害にあった子どもではないこと、被害にあって大
人に対する不信感とショックで傷ついている子どもを叱り
つけ、追い打ちをかけるような行為をしてはいないだろう
かと。

公園から遅くなったとあわてて帰ってくる子どもが、家
までほんの数メートルのところまで被害にあうことだであ
るのです。そんな時に「あなたが悪いのではない。悪いの
は、子どもにそんなことをする大人なのだ」と確認してあ
げること、「私に話してくれてありがとう。よく話してく
れたね」と親が心を開いて受けとめること、そして「あな
たの言うことを信じるよ」と、信頼する姿勢を示すこと、
これらの言葉がけをクライシス（緊急）・カウンセリング
と呼んでいます。

精神科の医師にカウンセリングを受けても、もしかする
と五分間しか見立ての時間がなくて、あとは薬の処方です
わってしまうかもしれません。けれど、このクライシス・

カウンセリングの技術は、誰にでも習得できて、しかも素人だからこそ余裕をもってできる、最も有効な方法だと言えます。また子どもの治療に関しては、誠実に向き合う大人が迅速に対応すればするほど、その後の心理的な外傷が少なくてすむのです。

「たったひとりの人だけれど、あの時私の話を信じてくれた。子どもだからうまく話せなかったけれど、心の底から心配してくれた。そして悪いのは私ではないと言ってくれた」。子どもが成長していく過程でそんな記憶を残していれば、きっと、その後の対人関係の中でも、人を信頼することを学ぶでしょう。その子の人生の岐路にかかわるので、大人たちの言葉は強い影響を残すものと思ってください。これからは子どもの身近にいる大人ほど、自分の対人関係、価値観を常に見直し、まずは自分の権利意識についてきちんと問い直す必要を迫られることでしょう。

セクシャリティ・アビューズ

この人権意識の高まりの中で最も個人的なことである「性の自己決定権」については、未だに暗黒大陸の領域です。それは時代の影響で古い、新しいと簡単に決めつけられることではなく、人間が人間たる所以である性という豊

かなエネルギーについて、歪んだ欲望のみが取り沙汰され、あまりにも敬遠されてきたせいなのでしょう。

まだ学習されていない性の側面もたくさん残っています。セクシャル・アビューズ（性的虐待）という言葉は、ずいぶん社会に浸透しました。では、セクシャリティ・アビューズ（性的指向性への虐待）とはどういうことなのでしょうか？

男の子の性被害に対しては、世の中はなかなか耳をかさないという風潮がありますが、CAPの思想を理解して最初にワークショップの要請をしてくれたのは、東京のある地域の子どもの会のみなさんでした。その地域では男の子に対する性的被害が多発し、心配した大人たちが熱心に働きかけてくれました。子ども会での評判がよく、また隣の子ども会からも要請がくるというように、まさに草の根的にCAPの評判は広がっていきました。

男性への被害ということであると、バンクーバーには、男性の性的虐待の被害者のためのカウンセリング・システムがあるのです。性的被害を受けるのはなんとと言っても女性が多いのですが、男性への被害というパーセンテージの少ない問題に関しても、きちんと取り組んできているのが、素晴らしいところです。

研修の最終日、男性サバイバーのカウンセラーとして従事しているドン・ライト氏の講義は、とても心に残る内容でした。男の子に対する性的被害の三分の一が女性からの暴力で、一二歳から一四歳にかけての時期が最も多いこと、そして男性が男性にする虐待は、合意の上によるSexと誤解されがちなために、被害者の傷の深さが理解されにくいということでした。

男性が男らしさを求められる社会の中では、自分が性的な被害を受けたと告白することは、もしかすると女性のカム・アウトよりも苦しいものかもしれません。男の子のカウンセリングの場合には、「泣いてもいいんだよ。泣いてもあなたのパワーがなくなるわけじゃない」ということを、特に強調して言うていくそうです。

さいごに

「個」としての権利意識をなかなか獲得できない日本の現状を思う時、カナダでは二〇年前にやっと始まった、この子どもへの性的虐待への取り組みが、二〇年後この日本ではたして同じように根づいているだろうかと思うと、暗澹たる気持ちになる時があります。

最も豊かなはずのものが、時に最も残酷な武器にも豹変

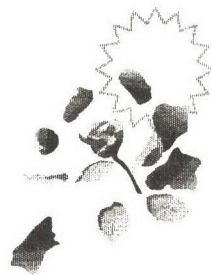
するという事実を、大人たちこそが真摯に受けとめていかなければならない時期にきています。ひそひそ話やニヤニヤ笑いで語られることの多くが、今までどんなに女性の尊厳を貶め、ひいては男性自身をも卑しめてきたでしょうか。性を率直に語れる場があることは必要です。そして性の豊かな側面を、うまく伝えていくことも、今とても必要とされています。生まれたままの姿形で、生まれた時から歪められない感性で、素直な自分として、不当に卑しめられずに人生を送ってゆくこと、それは今を生きる誰にとっても、願わずにはいられないことです。

すべての性的虐待に共通する「恥と罪悪感」から自由になっていくためには、男の子らしさ、女の子らしさという「らしさ」を再検討し、ジェンダーフリーの教育を学校現場から始めていくことが、今後ますます必要な課題になっていくだろうと感じます。

バンクーバーは緑豊かな町です。町のあちこちの大本にはリスが住みつき、車椅子に乗った人々が町を行き交っていました。まるでおとぎのくにに迷い込んだかのような平和な光景でした。しかしそれは、人の心にある最も陰惨なものから目を逸らさなかった歴史の成果でもあったのです。

性暴力について男が語るということ

小西正人（新聞記者）



「小西正人の強姦魔、小西正人の強姦魔。女の気持ちからんのか、この馬鹿者」。中年女性とおぼしき聞き覚えのない一本調子の声で、留守番電話に残されたメッセージ。僕は深夜に職場兼自宅の「駐在」に帰ったところだった。その日、紙面に筆者名の入ったコラムが載った。その反響が手元に届いた第一号がこれだ。

朝日新聞社会面で「性暴力を考える」という連載を担当した。二月末に第一部「被害者から」で、被害者が訴えにくい制度や社会意識の問題を取り上げた。七月初めに第二部「男から」で、被害者と加害者の意識の落差の大きさを

伝えた。僕が主に取材班（注）に参加したのは第二部。連載が掲載された約十日後の七月十九日付（東京本社版解説面）で、取材しながらつらつら考えたことをコラムにした。企画本編やコラムに対する反響は、なかなか興味深いものが多かった。本編への反響は紙面で紹介済みなので、ここではコラムへの反響について書こうと思う。

記事を読んでいない人も多いだろうから、まず内容を簡単に説明しておく。見出しは「妻や娘と『性暴力』を語る」。本当は、連載本編ともども、図書館ででも全文を読んでもほしい。

妻や娘と「性暴力」を語る

冒頭に、「性暴力」の企画に男性記者として参加したからには男性読者にこのテーマを自分の問題として考えてもらいたいとして、連載で取り上げた加害者らと一般の多くの男性との「近さ」を示すために、自分自身の「苦い」個人的な体験を二つ書いた。

ひとつは大学生のころ、つきあっていた女性から「あなたにレイプされた」と指摘された体験。確かに「その時」に彼女は嫌がる様子も見せたが、僕には「レイプ」という認識はまったくなかった。さらに、指摘を受けたこと自体を、今回の取材を始めるまで忘れていたこと。

もうひとつも大学時代、外国の旅行先のホテルの一室で、男性の友人に突然、抱き締められてキスされた体験。彼が同性愛者とは知らずにいたため驚き、拒絶した。後で、彼が「同性愛者だからと差別され、傷ついた」と話していたと伝え聞き、まるで自分の方が加害者として責められているような気がして困惑したこと。

男たちに第一の体験を話すと、多くは事もなげに「そんなのだれにでもある」という。第二の体験は、笑い話にしかならない。男性は、加害の重さも被害の可能性も感じ取りにくい。

性暴力の問題は、女性と男性の意識の差が壁になる。この差を埋めるために、男の側からできることは、女性をどのような場面で傷つけてきたかを自覚する努力をすることではないか。僕のように「レイプされた」という指摘を待つのではなく、むしろ身近な女性に対し男性側から問いかけてみてはどうだろう。妻でも、恋人でも、娘でも、母親でもいい。

もし、相手が妻や恋人なら、
「自分との間で、強姦されたと感じたことはなかったか」と、問うてみよう。

男性には抵抗があるだろうし、女性も戸惑うだろうが、女性から返ってくる言葉は、「痛み」を想像する貴重な手がかりになるはずだ。

——ざっとこんな内容だ。

女性からの反響

反響には大きく分けて二種類あった。前半の個人的体験部分のみについて反応しているものと、全体的な主張を踏まえて自分の考えを伝えてくれたもの。

最初に紹介した留守番電話のメッセージは前者タイプの典型例。この人は個人的体験の、しかも第一の体験部分だ

けしか読んでくれていないような気がする。コラムが載った当日に電話やファクスで来た反響には前者タイプが多い。留守電メッセージとは逆に「勇気ある文章で感動した」と肯定的にとらえ、本社社会部に電話してくれた読者も数人いた。件数では肯定の方が多かったので、正直、ホッとした。しかし、留守電メッセージのように受け取る読者も、一定の割合で必ずいるのだ。どうも、第一の体験談の印象が強すぎたようで、全体の主張が届きにくくなってしまったようだ。

翌日以降、はがきや封書による反響が届く。

横浜市内に住む二二歳の女性からの封書は前者タイプで肯定的だが、簡単な電話と違い、便せん4枚に書かれた上に、まだ書き足りないのか、封筒にも「P. S.」があふれていた。

彼女は同性に厳しい。そして、僕をなぐさめるようなトーンで終始している。第一の体験に対して「はっきりいって被害者にも問題があります。本当に心から嫌なら、けつとばしてでもかみついてでもそこから逃げるのができません（私ならそうします）」と言い切ってしまう。「彼女の方は嫌という気持ちもあって、でも女性として男性に抱きたい気を起こさせる自分というのがうれしいっていうのも

あるんだと思います」と続き、「女性の方も本当に思いやりがあれば、男性が性欲が強く、頭に血がのぼっちゃうことも理解できて、嫌ならそういう状況にならないようにすることができるとは思いません」とくる。

連載本編の第一部で、被害者の「自衛」の困難さを具体的に伝えたくもりだが、この種の意見は依然として後を絶たない。彼女の場合は、特に「恋人間レイプ」の問題として限定しての意見かもしれないが、気になる。

実は、本編では「恋人間」や「夫婦間」のレイプには、まだ踏み込んでいない。どう取り扱うか、取材班内で議論したが、今回のシリーズは新聞としては初めての試みだけに、まず「入門編」で行こうということになった。「恋人間、夫婦間レイプ」は今後の課題だ。いずれは正面から取り組みたい。

埼玉県のある主婦は後者グループ。「夫婦間でも嫌も応もなくセックスされた時は『これはレイプだな』と思っています」として、「妻が本音を言ったら大変ですよ」と言う。彼女は「夫の本音」と「妻の本音」を列記してみせる。

夫「してもらっているうちが花ヨ」 妻「これ以上拒む

と後が大変だな」

夫「オレ位よ、お前にしてやるのは、本当」妻「セツクス抜きでアチコチの殿方にトキメいておられますから……」
夫「みろ、ヨカッター」妻「演技してサッサと終わらせて……ヤレヤレ終わったか」

こういう話こそ、夫に直接してほしいと僕は思うのだが、彼女の手紙は「男、女がよりよい関係になるために話し合いたい。夫と話せるかな。駄目だな」と、終わっている。

こう思う僕を冷笑するかのように、国分寺消印の無署名のがきは、「小西正人さん、あなたの認識はぞっとするほど甘い」と書き出している。

「ご自分では自らの加害者に目覚め、紙上で告白もした勇氣ある『オトコ』だと自己満足しているでしょう。結論が身近な女性と個人的に話し合ってみよう、だと？ バカじゃないだろうか。なぜ、男たちが勝手な思い込みをしようのか考えてみないのですか」

まさに、そのことを考える連載だったのだけれどもね。連載が十分なものだったとは、僕自身も思っていない。「甘い」というのも、その通りだと思う。でも、できることから始めないことには、何も変わらない。それですべて

がすぐに変わるとは思っちゃいけないけど。

千葉県の大学四年生の女性からの封書は「長年、記事の趣旨と同様なことを考えて参りまして、ですが、諸男性方や、時には女性たちの無理解に少々絶望しかけていたところでした」と語り始める。

「私が心を痛めておりますのは、今の社会構造それ自体（性的な分野では特に）男性中心にできていることなのです」。具体的な例として、彼女はポルノ雑誌やビデオを挙げる。ポルノを見ることを「男なら当然」と考える男性は苦手、としながら、「もし私が男でしたら、きっと同じ事を考えるのではないかと思います。なぜなら、幼いころからそのような社会構造に馴染むでしょうから」。

彼女は男性に「女性も同じ人間でモノじゃない」と気付けてほしくて、ある程度親しくなった男性には「あなたはポルノを見る？ そのことをどう思ってる？」と聞くという。

「仕方ないじゃん、オトコなんだから」と一笑に付す男性に、さらに「では、あなたは自分の大切に思っている女性、恋人でも娘でも、がポルノ女優になってもいいと思ってる？」と問う。大抵は「それとは話が別」と返すという。

彼女は「つまり、男性方は自分の大切な人にはさせたく

ないようなことを、ほかの女性にさせている、ということですね？　そしてそれを楽しんでいるのですよね？」と指摘する。これは多くの男性にとって痛いだろう。

それに加えて、こんな例も挙げている。「男性の友人が『たまたまネットでゲイの人向けのメールヌードを見たんだけど、なんだか性の対象としてだけ自分が見られるかと思うと嫌な感じがしてね、女の人がポルノを嫌がる気持ちがあわかった気がするよ』と言ってくれたりしたときは、

『ああ、この人とはちゃんと距離を置かない友達として付き合えるなあ、もしかしてそれ以上好きになれるかもしれない』と思っただけ嬉しかった」

僕も、こんな反響をもらって嬉しかった。

ただし、彼女はコラム執筆の動機について「もしかすると、取材で会った方や同僚の方かなにかに男性である小西様から呼びかけるように催促されたのかも知れませんが、他にも」という疑念を差し挟んでいるのだが、他人に言われて書くような話ではないだろうに。なんでまた、そんな風に感じたのか、そこを聞きたいところだ。

ほかに、自分自身の被害体験を書いてくれた投書も数件いただいた。この種のものには連載本編に対する反響でも多かった。なかには子供のころの体験を引きずっている六十

代、七十代の女性もいて、問題の深さをいやおうなく気づかされる。第一部、第二部合わせると本編には四百通近くの投書があり、その三割近くが自分の被害体験を告白するもの。内容が内容だけに、軽々しく表には出せないが、今までだれにも話せなかったことを、連載がきっかけになってようやく外に出せたという声が多い。プライバシー保護を前提に、なんとか紹介できないものかと考えている。

男性からの反響は……

以上は女性からの主な反響。問題は、男性からのもの。コラムは男性読者を念頭に置いたもので、冒頭にもそう明記した。ところが、見事に来なかった。電話、ファクス、手紙合わせて五件。女性の約三分の一にすぎない。

しかも、そのうちの二人は連載本編に対して何度も批判的な投書をいただいている「常連」男性だ。

渋谷区の男性は、「男は生来、攻撃的で支配するのが好きです」という前提で「『性暴力』について、女性と同じ認識を持つというのは男の一部、女のようになれと言うことと同じです。これはできない相談」として、「まず、女性の方から男の欲望や意識を理解すること、これが『性暴力』を減らすための有効な方法だと、私は考えます」と論

じている。これは、横浜市の二二歳の女性の意見とつながってしまふ。

もう一人の常連は、旧日本軍人だったという八十歳の男性で、自分の初体験は、中国山西省で従軍慰安婦相手だったことを、時には反省も込めて、何度も書いてきた方だ。

「弁解ではなく、明日の命がわからない」戦場では仕方がなかったとし、「でも、現代の若者よりは総じて行儀がよかったと戦友会で話している」そうだ。

この男性は、戦場でもない現代日本で簡単にセックスする若者たちを「性が乱れ切っている」と嘆き、恋人をレイプした「破廉恥男」に対し「小西さん、まず自分の行動、心から更新して下さい」と言う。

男性からは総じて切実さを感じさせない反響が多かったが、車いすの身体障害者という男性からのものは考えさせられた。

「多くの障害者は『性の差別』を受けています。もちろん、障害者にレイプなどという乱暴な行為は不可能です……それ以前に、障害者自身が『差別』を異性から受けているのです。つまり、障害者は異性より、『性の対象』と見られていない!!のです……悲しい運命、現実です」。

男性読者はこのコラムを読んでいなかったのか、というと、どうもそうではないらしい。少なくとも同僚の男性記者たちはよく読んでいた。ある先輩記者は妻との間でコラムが話題になったという。「ふだん新聞の解説面なんて読まない妻から話題にできたのでびっくりしたよ」という先輩は、具体的にどんな話をしたかは「プライバシー」だとして教えてくれなかった。恋人との間で話題にした後輩もいた。直接、投書などの形で反響として返ってこなくとも、どこかでだれかが、あのコラムを考えるヒントにくれていると想像すれば、いくぶんかは救われる。最近では社内でもふざけ半分に「強姦記者」のレッテルを貼られている自分だが、この汚名は勲章だと思っている。紙面の片隅にでも書き続けていくしかないのだろう。

(注)取材班は僕のほかに、女性記者二人と、男性記者二人、もう一人アドバイザー的なベテラン男性記者が一人。取材班にデスクを加えた計七人が毎回企画会議に参加していた。決して社内のオーソライズされた取材班ではなく、個々に意欲を持った記者が自発的に集まったゲリラ的な集団だった。取材班の中では、シリーズは今後も続く予定だが、本当に続くかどうかは読者の支持次第である。

シ
ネ
マ
の
魔

最後のガンマン、クリント・イーストウッドは
「娼婦を人間らしく扱え！」と叫んで夜の闇に消えた

武 田 秀 夫

テレビはニュースと野球ぐらいいしか見ないから人があの
コマーシャルが面白いのなんのと話していてもほとんどカ
ヤの外なのだが、「フアイトォ！ いっぱーつ！」という、
あれだけは虫酸が走る。「バーカ！ 勝手にやってろ」と
ののしってカチャカチャと他のチャンネルに回してしまう。
見るにたえない。にもかかわらず、いつのまにか「リポビ
タンD！」と心につぶやいているからいやになる。

それに対して、小さな女の子が、サードベースにたどり
ついてこれからホームをうかがおうとする父親のそばに来
て「パパ！」と呼びかけるコマーシャル。あれが好きだ。
父親は「わかったわかった、あとでね」と幼い娘に手をふ
り、またホームをうかがう。すると娘が実にかわいらしい

仕草と声でお菓子を差し出しながら「パッパ！」とまた呼
ぶ。思わずベースを離れて子どもからお菓子をもらおう父親。
とたんにタッチアウト！ ぼくは見るたびにうれしくなっ
て笑ってしまう。

それから、「ジョージアでひと休み」というコーヒーの
コマーシャル。あれも好きだ。缶コーヒーを手に猫のよう
に寝そべっている若い女。その視線の先には、上司にさか
かける。「があととやっちゃえよ。があと」。しかし、
「ま、そうも行かないか。ジョージアでひと休み」と、手
にした缶コーヒーをあげて、男に、慰めともエールともつ
かないものを送る。男は見えるはずもない女の視線を、し

かし感じるのか、ちょっとふりかえるようにする——。

友人に電話で問い合わせたら、あの女優は飯島直子というのだそうだ。

「ファイトォ！ いっぱーつ！」とドリンク瓶を突きつける筋肉隆々たる男の厚かましさに比べて、幼いわが娘の視線を感じたばかりに気をそらされてせっかくのチャンスやダメにしてしまう父親や、働いている間も今風観音様のような女の視線をそこはかとなく感じて、なかなかハがあんと行くVことのできない若い男の方がはるかに好ましい。

西部劇は元来が男の映画である。だが、クリント・イーストウッ드의「許されざる者」は、長きにわたって一種の様式美にまでみがき上げられた西部劇としての結構を気品高く保ちながら、しかも、見えざる女の視線によって宙吊りにされた映画といった印象をぼくに与える。

細く強靱な糸——女の視線によって縛り首にされた西部劇の美しい死体。

雨の夜に、客となった牧童の「アレが小さい」と娼婦が思わず笑った。それが事の発端だ。激昂した牧童は女の顔をメッタ切りにして捕えられるが、鞭打ちのかわりに五頭の馬を娼館の主人に渡すことを条件に保安官ジーン・ハックマンによって釈放される。激怒した仲間の娼婦アリスは

女たちから金を集めて千ドルの懸賞金をかけ、それを目当てに流れ者のガンマンたちが町にやってくる。その中に、今は引退した老ガンマン、マニー（クリント・イーストウッド）の再び銃を手にした姿もあるというように展開するわけだから、この映画において、まず第一に気づかされるのは、男たちは、いわば娼婦たちの怒り、彼女たちの據出した金によって死の踊りを踊らされているということだ。

ところで、保安官ジーン・ハックマンは当初トンカチ片手に自分の家をつくりかけている一見普通の男として登場する。彼が雨の夜に逮捕された二人の牧童に下した処分にしても、いきなり銃の台尻で殴り倒し鉄格子の中に放りこむといった、ジョン・ウェインなどがよくやる形をふまずに、それなりに穏当で冷静な裁き方だという印象を観客に与える。「西部劇らしい西部劇」とぼくは先に書いたが、そうした骨格を全体として保ちながら、一方でこの映画は微妙にそのハ西部劇らしさVを裏切っていく。

旧来の西部劇を批判すると称したハニュー西部劇Vといったものをぼくたちはずいぶん見させられてきた。が、それらの多くは、結局のところ、タライの水を流そうとして肝腎の赤ん坊まで一緒に流してしまっただような味気なさをもたらしたただただの対して、「許されざる者」は、

西部劇の伝統に敬意を払ってその精髓を保持しながら、西部劇の常套を次々と破砕し見る者に新鮮なショックを与えるという離れ業をやつてのけた。最も西部劇らしい映画が、 \wedge 西部劇的なもの \vee に引導を渡し、その終焉を告知しえた美しい奇跡——。

少し先回りしすぎたようだ。

「フェアではない。男を吊して！」と叫ぶアリスに向かって保安官は、「お前ももう十分に血を見ただろう。今さら吊してどうなる。あの牧童はイカレたやつだが、流れ者とはちがつてちゃんと働いている。だから女さえ抱かせておけば……」と言い、アリスに「断わるわ」とはねつけられるのだが、彼は彼なりのやり方で秩序を維持してきたその町に賞金目当ての流れ者が集まってきた時、当然のこととして銃持ち込み禁止の布告を出す。そして、伝説的な殺し屋イングリッシュ・ボブ（リチャード・ハリス）がなおも拳銃を隠し持っていることを見抜き、群衆環視の中で徹底的に叩きのめす。そのシーンは、いかにも西部劇の作法を正しく踏襲して、子どものころから数多くそうした映画を見てきたばくのような人間に思わず快哉を叫ばせる痛快さなのだが、（だってそうだろう。自分の伝記を書かせるために小説家を帯同して旅をするような、一見紳士風の気障

なイングリッシュ・ボブの仮面が容赦ないジーン・ハックマンの暴力によって酒場前の泥土にまみれるさまに、男たるもの！ だが快哉を叫ばずにいられよう）、その一方で、その見せしめの暴力が、（西部劇に暴力はつきものだとは言い条）、西部劇の様式美、その伝統的な常識を超えてあまりに過剰に、あまりにサディスティックにふるわれるのを見た時に、ぼくたち観客は、心のふるえるような不安、怖さを覚えるのである。これは西部劇の伝統的なルールに対する侵犯ではないか……と。

このシーンは、もしかしたらジーン・ハックマンこそがこの映画のヒーローなのではないかと一瞬思わせるほどの凄まじい迫力がある。クリント・イーストウッド自身が演じたダーティな警官ハリリーが西部の町に転生したような。

たしかにこの保安官は、拳銃というトンカチをふるって彼なりにこの町を秩序ある \wedge 家 \vee につくり上げ、完成の暁には、そのポーチに揺り椅子を据えて平原に沈む夕日を眺めようとしたのだ。だが、部下の保安官助手が言うように、その家のポーチはゆがんでいる……。

牧童のナイフで顔が無残に切られた娼婦の頭ごしに、懲罰の鞭打ちのかわりに馬を、しかも当の娼婦にではなく娼館の男に渡すことを恫喝して牧童に認めさせる。そのよう

にして維持される秩序——暴力を背景に女を踏みにじって維持される秩序が、彼の建立しようとしたへ家Vだったのだ。

保安官は最後に呟く。「なぜおれがこんな最期を。新築していたのに」と。

秩序を守るためには暴力も辞さない。苦渋の果てにやむをえざる暴力をふるう、それが西部劇を支えてきた情念である。その情念を過剰に体現していつか怪物的な保安官となった男にむかって老ガンマンは、「貴様こそ本当の悪党だ」と言つてトドメの銃弾を撃ち込むが、そのシーンに、へ西部劇的なものVを西部劇によって葬ろうとするこの映画の情念が見事に凝縮されていると言つていいだろう。

西部劇「許されざる者」を宙吊りにする第一の女の視線がそのように男をして死の踊りを踊るように挑発して自滅へと導く怒りの視線であるとするならば、第二の視線は、銃を握る男の手を萎えさせるように働く女の視線である。あの愛らしい幼い娘のような。あるいはあの若い女の今風観音様のような。

映画は冒頭、夕焼けの丘に立つ一本の木のかたわらで墓を掘る男のシルエットを遠く映しながらのナレーションで始まる。

「若く美しい娘クローディアは母の意に背き、ウイリアム・マニーと結婚した。マニーは人殺しで酒浸りの残忍な札つきの悪党だった。だが……」

美しい妻のその視線が死後もマニーを支え、映画全体を貫き、マニーの相棒（モーガン・フリーマン）の銃を持つ手を萎えさせて肝腎の時に引き金を引くことがかなわなくさせるのもまた家に残してきたインディアンの妻の無言の抗議の視線であつてみれば、そうした第二の女の視線こそが、この映画を西部劇の傑作として自足することを阻み、西部劇の胎内からそれを破つてあらわれ出た別種の名づけようのない映画、映画そのものを生んだということが言えるだろう。

町を去るクリント・イーストウッドが叫ぶ最後の言葉、「娼婦を人間らしく扱え！ さもないと皆殺しにするぞ」という矛盾にみちた言葉には、だから、西部劇という限界の中で西部劇を超えようとしたこの映画の際どい美しさが結晶しており、それは深刻ぶっているわりに底の浅いハニー・西部劇Vなるものついに発することのできなかった。徹しい言葉なのであった。

この一カ月は立て続けにコンサート会場へ駆けつけた。その中でも特筆すべき二つのコンサートについて話したい。

まずは、ルーリードの来日公演。彼はポップアートの鬼才、アンディ・ウォーホールの近くに居た人で、七〇年代初頭の伝説の人、そしてニューウェーブロックの元祖であるが、来ていたのは一〇代二〇代の連中であつた。中には開場前からラリッていると思われるのも居て（明らかに酒のせいではない）、我々（ヒロ君と私）をわくわくさせた。

その翌日が、今度は打って変わって、盲聾者チャリティコンサート。これにはわが家のウッチャンがギタリストとして登場。私は多摩美大の生徒を連れ、楽器持ちをした。多摩美の彼はルーリードは知っていても盲聾者の演奏シーンは知らなかったようで見入っていた。盲聾者の演奏中は、黒子として盲人が後ろで開始

うるう 関都市建設計画 ☆7

のキューを出したり、客の拍手を伝えていた。傍らの手話通訳も音楽に合わせて、へそ出しルックで熱演していて、その精一杯の「背伸び」が微笑ましかった。

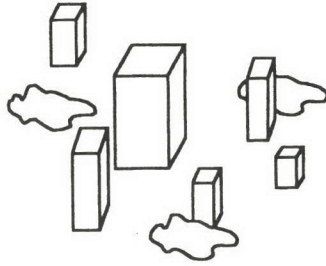
以上の音楽シーンを巡ってみて、ふと、自らの学生時代を思い出した。ルーリードの音楽仲間でもあるイギリスのブライアン・イーノのレコードジャケットに出会った時の不安と感動。私が初めてそこに男が口紅をつけている妖艶な姿を目にした日のことだ。高校生であつた。

大学になり、私はいつの間にか二重生活をしていた。一方で手話サークルに出ながら、一方では口紅をつけてみたり、バレエシューズで町を歩いてみたり……。その切替えは学校や町のトイレの中である。三年間老人に変装して老人の好みを調査したというニューヨークの女性デザイナーが居たが、彼女同様、変身してまずドギマギするのは、トイレを出てすぐ

の瞬間である。変わり目で社会の目の洗礼を浴びる。すれ違いざま、相手との視線があったりする時に最初はどうか対処しているものか、慌てた。そのうち一つの解決策を編み出した。相手と顔を合わせた瞬間、四十五度首を傾げることである。簡単だが、誰もそんなポーズを取らない。が、首を傾げると、四十五度世界観が変わる。と同時に、相手との関係性まで変わる。要は相手が、男の化粧という訳の判らなさを何とか頭で割り切ろう（反発か、容認）とする前に、もう一つの判らなさ（「ねじれた視線」を作る）を勝手に追加してしまうことである。

百聞は一見にしかず。お試し頂きたい。大学一年の秋、化粧としぐさの華麗なロックスター、デビッド・ボウイの影響もあって、総鏡張りの部屋で私はパントマイムのレッスンを受けていた。お前は四〇代の体だよ、との指摘にメゲながら

坂部明浩



も、男女五〇センチで向かい合って泣き顔と笑い顔を大まじめに見せっこした。その頃の同期は東京タワーの蠟人形館で人形に混じってマイムをしたり、演劇人として活躍（彼は犬に成りきることに練習の大半を費やしていた）するなか、私はその頃やっと流行る兆しを見せていた手話劇へと走った。私の二重生活の打ち止めであった（手話の動きには歌舞伎から取ったと思われる艶やかな動きのものがある、劇の形式でこそ、その本領が発揮された）。

そして今。ルーリードの公演には情感のほとばしる妖しさがあった。盲聾者の公演には、人が人に伝える「有り難さ」が感じられた。だが、情感の解放ばかりでは、共鳴こそあってもそこに会話が生まれにくい。伝えることに専念すると、自己規制の罠にかかる。この相剋で手話劇も聾者界もいま苦悩している（次回へ）。




変な子じゃないよね ①


滝野澤直子

中学校の職員室は、いつもぎざぎざしていた。一学年につき十数クラスというマンモス校の先生は、顔も覚えきれないほどたくさんいて、職員室はまるごとひとつの学級のようにも見た。

そこには見えない空気の流れがあった。生徒たちは、入り口で必ず、「〇年×組、〇〇です！失礼します！」と、みんなに聞こえるように叫ぶことになっていたのだけど、同じように名乗っても、優等生たちが包まれる暖かい気流と不良たちが押し流される冷たい気流とはわかれていたような気がした。もっとも、お抱え生徒会の役員だった私は、いつも暖気流に包まれていたから、なんの窮屈さも感じなかったけれど。

あるとき、学校の代表で市の防犯弁論大会に出ることになった。私の書いた原稿は「生徒会を活性化しよう」という趣旨のもので、けっこう気にいっていたんだけど、生徒指導の先生の趣味とは合わなかったみたい。「今度の弁論大会には、こっちの原稿でいってくれないか」と、原稿用紙の束を手渡された。先生が書いたその物語は、実際にいた万引き少年が主人公で、なぜか私が、彼が立ち直る手助けをするという感動のストーリー。先生は、これは以前あった本当の話で、いい話だから、本人たちに代わって伝えてほしいと言う。少し釈然





としなかったけど、先生の言うことだから、間違いはないよね。これなら入賞も狙えそうだし。

その日から放課後は、生徒指導の先生とマンツーマンで語り方の練習をした。大きな声で、抑揚をつけて。ここは弱々しく、次はうれしそうに。何度も原稿を読んでいるうちに、私は本当に自分が「不良少年を更生させた」ような気になっていた。

大会当日。練習のしすぎで喉が荒れた私に、市の会場に引率で行ったその先生は、のど飴を買ってくれた。何を伝えたいかなんて、もはやどうでもよくて、とにかく審査員たちを話に引き込むことが大事だった。ステージに上がった私は血統書付きの犬のように、訓練してきた通りのことを披露した。なんの後ろめたさもなく、堂々と。結果は優勝。よかった、これで学校のためになるね。トロフィーが光って見えた。

数日後、用事があった職員室に行った。優勝の余韻でフワフワした心地が顔に出ていたのだろう、男の先生が声を掛けてきた。「いい成績だったそうじゃないか」

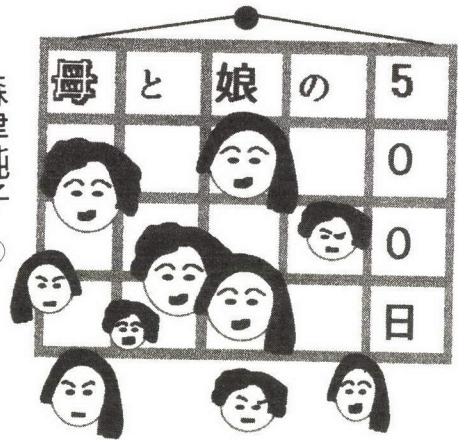
「はい」と無邪気に顔を上げたら、その先生、笑っていないんだ。おぼさんの先生が、「何について話したの」と聞いてきたけれど、その顔も「答えられるわけがない」と言わんばかり。一昨年の担任の先生が、すれ違いざまに、「あんたもやるもんだね」と言い捨てて出ていった。

優勝して初めて、先生たちは弁論の内容を知らされたようだった。実は、その万引き少年は一昨年の担任の先生の今のクラスの生徒で、私と同学年。すぐそばの教室にいた男の子だったんだ。私は知らないうちに、仲間をダシにして名誉を得た卑怯者になっていた。

風向きが変わり、今まで私を包んでいた暖かい空気はどこかへ行ってしまった。その時から私にも、職員室に吹く風が見えるようになった。

森津純子

⑥



奇跡の時間

薬を使い始めてからというものの、母の病状は不思議なくらいに落ち着き始めた。確かに、すぐに元の危険な状態に舞い戻ってしまいそうな危うさはあったものの、母は少しずつ自分のやりたいことができるようになった。この時間こそが、亡くなる直前に現れる「仲直り」と呼ばれる「奇跡が起こるかのように見える時間」だったのだろう。この時間を通して、私たち家族は素晴らしい体

験と共に、介護の闇を見ることになった。

具合の良くなった母は、積極的に活動を始めた。まずは、証券会社との取り引きだった。「なにも、こんなに具合が悪いのに、たかだか何%かの利息のための証券取引なんて、しなくていいのに……」と、ため息をつきながらも、電話をする母を半ば諦め顔で眺める。それから、料理。餃子を包んだり、人参の皮をむいたり、ベットのの上でもできそうな事を見繕って、夕食作りに参加してもらおう。今までの母なら、こんなちょっとの家事では満足できなかっただろう。でも今は、こんな些細なことでも嬉しい様子だ。それから、子供たちが出かける時の「お見送り」。母は、子供たちが出かける時には、その子の影が見えなくなるまで見送ることを習慣にしていた。子供たちを見送ることは、母としての自分を噛み締められる「幸福なひととき」だったのかもしれない。母の表情はとても生き生きとしていた。母の中の体と心のシーソーバランスは明らかに変わってきていた。

この時期、三週間ほど続いた穏やかな時間の中で、家族には楽しい思い出がたくさんできた。弟の誕生会から始まって、お花見、散歩、ピクニック……どれも忘れら

れない貴重な思い出となった。特に、桜が咲いたことは、「見られないだろう」と思っていただけに本当に嬉しかった。「早く、早く。早く咲いてちょうだい」と母の病状と睨めっこをしながら、一日千秋の思いで桜の木を見つめていた日々を私は忘れないだろう。

そんな頃、興味半分で以前に申し込んだ「インドの予言の書」が届いた。なにを隠そう、私は占いやまじいなどが、大好きなのだ。そのインドの予言書には、個人の生い立ちから死までの予言が書かれているという。予言書を手にして、私の胸は早鐘のように打った。

なんて書いてあるだろう。やっぱり、母は死ぬんだるか……？　そこにはなんと、「あなたが四五歳の時に母は死に瀕しそうになる」と書かれてあるではないか！　……なんだかその一言で、不思議な気分になった。

「そうか、それなら、これから奇跡的に回復するんだ！　治るんだ。そう言えば、ここのとこ、ママさんの体は良くなってきている。腸もはってないし、癌だって小さくなってきている。治るかもしれない！　奇跡が起こるのかも……孫の顔だっけ見せてやれるかも……よかったー！　待てよ。そうしたら、「母と娘の五〇〇日」の連載は

どうなるんだ？　母が助かるなら、連載は途中で中止だ。困った。どうしよう。

いや、それなら、それで、「母は私の『手当て』で治った」って書けばいい。その中で、「死を看取ることの擬似体験をした」って書けばいいじゃないの。

……占い一つで、ここまで気持ちが変わってしまう自分に心底びっくりしていた。

「藁にもすがる」ということは、こういうものか……。今まで、患者さんの家族が「〇〇療法」とか「△△教」に傾倒しているのを見て、

「治ると思いたいから、そう言ってくれる人の言葉にすがってしまいうすいんですね」

なんて、もっともらしい分析をしていたが、そんなもんじゃない。本当に、今や、「治る」という事の方が真実のような気がしてきたのだ。私の中の「娘」は絶対なる「希望」を確信してしまった。

……それをかろうじて踏み留めていたのは、「医者」の「なに馬鹿な事を言ってるんだー！　しっかり目を覚ませ！」という言葉だった。しかし、もはや「娘」はそんな「医者」をせせら笑うだけなのであった。

女が歳をとるといふこと

7

木村 栄



オーストラリアに行ってきた。高齢者施設の研修を中心とした旅行は予想以上に楽しかったが、最後の夜、「はしゃぎ過ぎよ、聞き苦しかったわ」と同室の友人の響壁を買ってしまった。

日本のケアハウスにあたるホステルのデイセンターで、お年寄りと一緒に昼食をとった時のことである。

私も仲間の一人と四人がけのテーブルを囲んだ。左手は艶のよい白髪とカラフルなドレスがよく似合う女性で、右手は背筋のシャンとした大柄な紳士である。

彼がゼリーを切り分けたのを見て私も食べようとしたら、女性に「スイートだから後で」と注意された。見ると彼も切り分けた後はスプーンを置いている。私の失敗が呼び水になったか笑いの絶えない昼食になった。彼は和やかに話し掛けてくれる。好意に応えたいが、私の英語力では如何ともなし難い。聞き取れなくて何度も聞き返す羽目になる。そして彼はその都度、「アイトリメンバー」と響きのよいバスで悠然と答えるのだ。表情を変えず、胸を張り、威厳に満ちた「アイトリメンバー」が出ると、つい四人で笑ってしまう。

その楽しかった情景を笑いながら披露したのがいけなかった。痴呆老人を笑い者にした？ わたしが？ まさか！ 思ってもよらない成り行きに驚き、おろおろ

と言いつを探す内に行き違いの背景が少し見えてきた。笑いながら話せないのは、そうできない差別的な状況があるからだ。だが、彼等は配慮を要する施設の老人ではなく、人生の黄昏を堂々と寛いで過ごす魅力的な先達である。私との関係は全く対等だった。

研修では入居者の権利擁護の徹底が強調され、当初はどんな権利がどんな風にと、目を光らせて見学した。それが何時の間にか気にならなくなったのは、すべてが自然で違和感がなかったからである。人間の尊厳が守られるというのは、こういうことかと改めて感じさせられていたところだった。

互いのほけ具合をユーモラスに観察したり報告し合ったりしながら、楽しく老いてゆきたいと私は思うのだが。

調理実習授業風景、その1。

実習中はホント戦争状態。ワイワイ、ガヤガヤ。キャー、火がついたー、肉が足りないーい、どうしようキャベツ忘れたー、塩入れすぎたー、とまあ実にごやかしい。時には火災報知器まで鳴ってしまう。けど、この喧騒がうそのようにシーンと静まりかえる時があ



る。そう、出来上がったものを食べる時。まったく、食べるって行為は偉大だよ。

その2。「センサー、チョーうめえよこれ、ちょっと食ってみな」と得意げな生徒。「オー、どれどれ、ちょっと味見」と僕。ウツ、何これ！とは口には出さず、「ウーンなかなかだね、でもちょっと薄味かな？ もうちょっと塩胡椒をきかせるともっとよかったよ」と言っておく。じーっと僕の顔を

をうかがう生徒の真剣な眼差しが、ホッと和らぎ、ニマーっと笑顔に変わる。料理の美味しさは、味ではない。自分で作るってこと、みんなで食べるってこと、それがなによりも食べ物を楽しむくさせる。

その3。トントントンと胡瓜をリズミカルに切る。フライパンをシャパッ、シャパッと鮮やかに返す。なかにとっ

ても手際のいい男子生徒がいる。彼はその時ヒーローだ。彼を見る女子の視線はちょっとウツトリ、僕もウツトリ。

一応学校で禁止されているバイトだけど、それで得た得意技が光る。ふだんの授業で死んでいる彼も、こんなところで生き返る。料理のできる男はカッコいい。家でも料理作れよな。

その4。「センサー、女の子は料理できないと結婚できないかな？」「なに馬鹿なこと言ってるんだ。料理のできる男をさがせばいい。これからの女は料理より仕事だ。でも、男も女も、仕事も料理もできるのってのが一番いいぞ」。そう、時代は変わったんだ。

その5。「センサー、胡椒少々ってどれくらい？」「そんなのは好みだ！適当に入れる」「ん？ ジャー、この瓶なん振り？」。フー、今日も調理実習が終わって体がガタガタだ。



授業風景

がかわる



いが
かわる



やあ！ こんにちは
— 神戸の工業高校を訪ねて —

兵庫女子短期大学
● 入江一恵

女と男の家庭科新時代

久しぶりに工業高校で家庭科実習手をやっている教
子に会いました。震災直後のことで適當下宿が見つ
からず、彼女は奈良の生駒から神戸の御影まで通
勤しているのですが、その疲れも見せず、授業の
準備をする楽しさ、
「こんな大きい男の子が私のいうことでも聞いて
くれるのですよ」と弾んだ声で話してくれました。
卒業後わずか十
ヶ月、その顔つきも変わっていました。こんなに
彼女を生きた生かされてくれている家庭科の先生
や生徒にお会いしたいと、私は三月、神戸市立
御影工業高校を訪ねました。

一度工業高校の授業をのぞいてみたいと思っ
ていた私の好奇心がくすぐられ、ここでどんな
授業が展開されているのか見てみたい、他の
工業高校では……と工業高校めぐりを
思いついたのでした。

「生活環境」へのアプローチ — 神戸工業高校

さて思いついてはみたものの、お相手のある
こと、どこが受けて下さるか多少不安になり
ながら、まずは「We兵庫の会」でもおなじ
みの井上さんに「PUSHU」。快く応じて
下さり、六月雨の降る中、神戸地下鉄の名
谷駅近くにある

神戸市立神戸工業高校を訪れました。

井上先生は前任校の商業高校で共修を実現し、六年のキヤリアをもってこちらに赴任して一年。この学校の家庭科の施設・設備・カリキュラムなどを検討し、軌道にのせたのは体育科から転科した根岸先生、他に常勤講師と実習助手の四人のスタッフ。「生活一般」三単位を一年生で履修、機械科二、情報機械科一、交通工学科二、インテリア科一のクラス編成、インテリア科は四〇名中女子三四名と女子が圧倒的に多く、他の学科は一〜三名程度の女子。分割履習なので一講座は二〇名程度。

「分割はいいわねえ。でも三時間連続、もつ？」と私は聞いてしまいました。

「うん。うちでは工業の専門科目は三時間連続というのが多いから、生徒はからだでは慣れているのよ。でも家庭科でやる時は教材の入れ方に苦労するの」と井上先生。

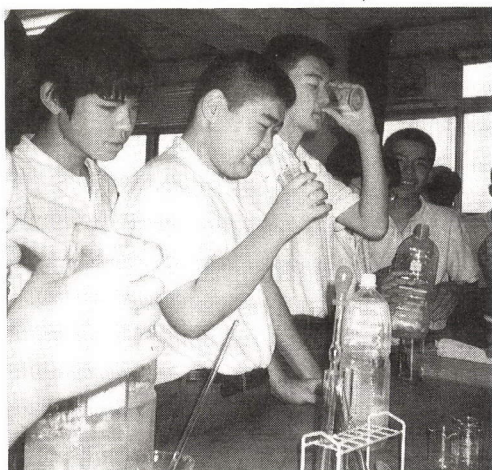
一学期は家庭生活と被服製作の組み合わせで始まり、生活環境、食物領域と続く。二学期は食物の続き、経済、住生活、三学期は保育でしめくくるという計画。三〇㎡の準備室をはさんで、左が総合実習室、右が調理実習室、両教室とも九〇㎡、暗幕、ビデオ装置など視聴覚設備もバッチリ、総合実習室は実験や被服実習にも使用するとのことだ

した。

さて、いよいよ本日の授業、交通工学科一年の「生活環境」が始まりました。

六時間扱いのうちの前半、右隣の教室では常勤講師の道上先生がVTR『家庭排水はきれいにできるか』を使って水問題の導入、左隣の総合実習室では根岸先生による「利き酒」ならぬ「きき水」がもう始まっています。「Aがうまい」「いやDだ」なかなかにぎやかです。一番おいしいと感じた水は「明石の亀の水」次いで「六甲の水」となり

水質検査 COD
A 六甲の水
B 朝一番の神戸市水道水
C 一晚汲み置きした水道水
D 明石の名水「亀の水」
E 淀川の水
F 合成洗剤水溶液 (0.1%)
きき水



きき水風景

ました。「神戸の水道水も一晩置くとおいしなっとうで」

「冷たいと味も臭いもわかりにくうんな」生徒のつぶやきが耳に入りました。つい教師根性が出て、「そう！いい所に気がついた。きき水は一五度位がいいのよ」とおせっかいにも私は教えてしまいました。あっちの教室、こっちの教室と忙しくシャッターを押していると、時々Vサインと共に「僕撮って」「何の新聞にのるの？」の声がとんできます。

「おいしい水・安全な水」のテーマのこの実験は、大阪から通勤している道上先生が用意した淀川の水も加えて水質検査へと続きます。バックテストによるCOD値と残留塩素調べです。廊下側には廃油から作った石けんや、石けんと合成洗剤による貝割れ菜発芽の比較実験結果が並んでいます。それに井上先生の家の昨日のゴミ全部をポリ袋に分別したのも並べられています。

続いて「紫外線照射器による蛍光増白剤の検出」「ゴミ処理問題」、そして「トレイの燃焼実験」「紙おむつの吸水による体積の変化の実験」と盛りだくさんに用意されています。

こんなにいっぱい、生徒の頭の中は大丈夫かな——私の心配をよそに、配布されたオリジナルなプリントに実験結

果や気づいたこと、感想が書きこまれていきます。テーマに関する興味深い資料も綴じ込みに。生徒の感想を読んでみると発泡ポリエチレントレイの燃焼によって発生した黒煙と異様な臭いには強烈な印象をもったようです。また紫外線照射によって再生紙が蛍光を発したことは意外だったと疑問を投げかけています。

日常使っている身の回りのものに抱いた疑問をどう解決していくのでしょうか。これが終わりではなくここから学習が始まると思うのですが。生徒の感想は家庭科だよりにのせられ、職員室や生徒を通じて各家庭に届けられるとか。それから——が聞いてみたいと思いました。

「交通工学科——ずいぶんむつかしそう。何を勉強するところなの」「ソーラーカーをつくる」「自動車の整備士の資格もとる」。トータルに環境が考えられる人間になってほしいなあと思いつながりながら帰路につきました。

利用したVTR

- 「家庭排水はきれいにできるか」NHKトライ&トライ三〇分
- 「水と魚と人と」日本釣振興会製作 二七分
- 「ファイバーリサイクル」全国ファイバーリサイクルの会製作 十五分

「たった一度のキス」愛知県立岡崎西高校放送部製作三分

ゆったりとした調理実習室。六名のスタッフで

——御影工業高校

工業高校は設置学科によってかなり男女比が異なっています。神戸工業高校のようにインテリア科があれば女生徒が多いのですが、2年生は電気科二、電子科二、工業化学科二、土木科一のクラス編成。電気と土木には女子はゼロ、電子、工業化学に二〜五名といった所で、校舎内を歩いていてもほとんど女子にお目にかかれません。生活一般三単位を二年二単位、三年一単位で履修。というわけで本格的に家庭科が導入されたのは九五年から、常勤講師の車谷先生を中心に非常勤の助手も含めて五名でレールを敷き、今年度三好先生が専任教諭として赴任し、六人のスタッフ。

家庭科の先生の紹介です
よろしくお願ひします



名 車谷 政子



名 折口 洋美



名 山本 英加



名 高岡 千絵子



名 園部 孝子



名 三好 久美子

四月に発行された家庭科通信第一号には、三好先生のイラストでこのスタッフが勢揃いしています。「すごい！」と思わず。家庭科通信二号には御工高生の「食生活に関する調査結果」が紹介され、その隣に、五月三日、大阪ドールセンターで開かれた「家庭科の森学園」に三年生が昨年度製作したパンツが展示された記事がのっています(学園長の私としてはほんとうに嬉しく胸がキューン)。実は三月に訪ねた時、サイケデリックなショートパンツを黒の長ズボンの上からはいたユーモラスな試着写真、スキー合宿時、部屋の中ではいている写真をわざわざ家庭科室に届けてくれたと車谷先生から見せていただき、家庭科一期生のおおらかな気持ち伝わってくるようで、出展を依頼したのでした。三・四号は授業風景が紹介され、りんごの廃棄率調べの実験結果や、次回の予告などものっており、生徒が学習状況を確認することはもちろんですが、他教科の先生や保護者に家庭科への理解を深めることもねらっているようです。

こちらでは三校時終了後昼食、四校時をすませた電子科二年の生徒が五・六校時と続く家庭科の授業にやってきました。一クラスを分割して調理実習と被服製作、チャイムがなるまでに手洗いと身仕度をすませることは約束。車谷

先生は生徒との約束は数少なくして必ず守らせることを心がけているようです。

四〇㎡の準備室に続く二〇〇㎡の調理実習室。生徒が入ってもゆったり、スースー空気が流れています。ここは当初四〇名一クラス単位を予定していたとか。何よりも私が驚いたのは調理台と調理台の間が一八〇cm、普通は九〇cmとか一〇〇cmなんですよね。今日は六つの調理台を使って三人ずつ、欠席者のある班は二人。これでは、〃僕食べる人〃はやってられませんよね。

説明を聞いたあと汗ダクでやっています。献立は親子丼、すまし汁、青菜のおひたし、と定番ですが、説明中まぜっ返していたH君も真剣そのものの顔つき、「僕の班二人だから先生食べて下さい」と私の所にも持ってきてくれる気の使しよう。後片付けは予想以上に熱心、コンロのふきこぼれもきちんと磨いています。流しのごみ入れコーナー、洗い桶、鍋類もすべてステンレス製。鍋の底は銅張り、引き出しを見れば調理器具のイラストが貼ってあり、整然とあるべき所に、必要なものを計画的に質のいいものを揃え大切に使用することがモットーとのこと。生徒が退出したあとの調理室はまた元のピカピカに戻りました。

クラスの半分は四階の被服室、ここは調理室と異なり、

西陽を受け、一方は壁でかなり暑く条件は悪いようです。パンツと同じようなサイケデリックなキルティングを使って半纏製作。みんな汗ダクでミシンと格闘。先生、先生！と助手の折口さんは大忙し。でもなかにはうまい、ミシンの達人がいます。これは確かに男女差ではなく個人差ですよ。出来上ったA君に着てもらいました。「いつ着るの」「夜みんなに見られないように」「家で勉強する時、暖かいじゃん」。このモダンな半纏で、きっと家の中は明るくなるでしょう。

工業高校で家庭科、もう特別なことではないようです。彼らも生きているのだから暮らしの中から素材を見つけて学ぶことは、将来だけでなく今の暮しを変えていけるはず。掲示板には測量士補試験、第一種電気工事試験（技能）、危険物取扱者試験と普通科高校では見られない資格試験の日程が目につきます。二年生より三年生の在籍の少なくなっていくことと考え合わせ、彼らの選択した道の厳しき、迷い、工業高校で生きる力をつけることの重い課題が伝わってくるようでした。

このあとも工業高校めぐりは続きますが、予定していた学校が震災で倒壊して目下建築中。一二月に完成しますので、二・三月号に掲載予定です。

この秋、本校は学校多忙化を絵に描

いたような、まさに「超多忙化」の中で毎日すぎています。象徴的に現れているのが、各種「当番校」の異常な多さ、大小合わせて八つもの大会当番校を請け負っています。これらは、それぞれ順番になっていくものが偶然重なったのです。さらに、今年は開校四〇周年にあたり、記念式典なるモノがつい先日ありました。これらに、真面目に取り組む我が職場は確実に時間をさかれ、そして疲れていると思うのです。私も三年間、尻まくって自分の生徒だけにはまっていた後ろめたさから、今年は一歯車として真面目にがんばっている疲れ気味の一人です。

こんな毎日の元気のもとはいまでもやっぱり自分の生徒ばかり。これも子離れできないようで最近はずかしくないかな？とも思うのですが、どうにも

なりません。

何回も泣きながら「准看辞めたい」と言っていたY子が、今の時代信じられないような劣悪な労働環境で働きな



から学んで半年、どうにか耐えて「戴帽式」の案内を手紙でくれました。仕事、組合、家庭……あらゆる予定をキャンセルしてでも戴帽式に行きたいと

思うのです。

M子は電話に出るなり「私もどうしていいかわからないの。ポロポロなの」と、泣きながら繰り返した。家庭や職場で悪いことが重なって、パニックで一時間話し続けたかと思うと、数日後にはニコニコと彼氏ののろけ話にきたりする。何がなんだか？でもきつとまた、泣いて電話してくるだろうと予想できます。

推薦で本校史上初めて短大看護科に入った日子。音信不通で気になってたら、ふらっと学校にあらわれて赤点の答案を見せて「今んとこ全部追試だよ」とヘラヘラしている。「かんべんしてくれ、おい！」と文句を言いつつも、今でもとてもかわいい愛すべき存在です。自分の子ほもっとかわいいと聞きます。卒業生はみんな他人の子、でも十分かわいいと思うのです。

◆兵庫発（by入江）

家庭科の新構想

日本家庭教育学会長内藤道子氏の講演から

八月二十七日、久しぶりに日本家庭教育学会近畿地区会に出席しました。「家庭科の新構想」と題する学会長内藤道子氏（山梨大学）の講演と討論に惹かれてのことです。六月に中央教育審議会の答申（Wee・八・九月号共学家庭科情報参照）が出され、教育課程審議会（会長三浦朱門氏）の始動も新聞で報じられるなど、共修三年目の定着をという現場の状況を越えて二一世紀に向けての周辺の動きはあわただしいと察知したからです。

三年前に発足した同学会「家庭科教育の新構想研究委員会」は、小・中・高・大の関係教員対象の調査結果を「家庭科教育の新構想研究——資料編」として九六年六月にまとめ、これをもとに目下新構想を練っている段階とか。現場の先生との討論によってまとめたということのようにした。

資料編の内容は、第一部——一貫性・適時性からみる小・中・高等学校家庭科の教育課程（各校種での教育内容の再構築のため）、第二部——生徒と教師の感想文にみる「男女が共に学ぶ高等学校家庭科」の成果と課題、第三部——「家庭科教育に関する基本調査」の結果と課

● ● ● 共学家庭科情報

題（児童・生徒のおかれている現在の教育環境の実態把握のため全国都道府県教育委員会家庭科指導主事対象に調査）となっています。

内藤氏の講演は中教審の答申を受けて、二一世紀を見据えた学校パラダイム転換の中で、家庭科がどうあるべきかに終始していました。もちろん学校五日制の完全実施を視野に入れ、学校教育は家庭地域社会の教育と連帯するものであり、家庭や地域に戻すものは戻す。家庭科万能主義から脱皮し、教えることは徹底して教える。教育内容は精選から厳選へと力説、厳選への例として被服製作の小・中・高での取り扱いを挙げていました。

各学校段階の育成すべき資質として、小学校では家族の一員としての自己認識（手仕事中心の事実認識、実感的発見を大切に）。中学校では、他者との関係を通して個の確立、人間関係調整能力を育てる。高校では多文化、異文化共生時代に他者との共生の中で自分を見直し、社会的認識によって自分の生活を拓いていくとし、領域は次の三つに整理しています。①個人および家族の発達と生活、②生活に関する生活資源と生活技術、③生活の営みと生活文化の創造。従来の被服、食物は②に入るのでしょうかとのこと。そして教科書の編纂も含め二〇〇一年～二〇〇四年に段階的に変えていくとのことでした。

結局討論の時間も余りなく、新構想の肝心の部分の説明が私にはよく理解されないまま終わりました。新構想は教課審にどう反映されるのか。厳選と「言う」からには、単位を減ずることが前提の新構想なのか。厳選された内容の隙間はどう埋めるのか。従来の食物、被服は②の範囲だけだったのだろうか？ ③に入るような内容も実践されてきたのではないだろうか。家庭・地域社会との連係プレイは結構だが、スリム化した学校から地域に戻したものの受け皿の整備は、等々の疑問や不安要素が残りました。

折しも「探究科」が奈良県立高田高校で取り入れられ生徒に好評とテレビが報じています。家庭科で行われていた課題研究そのままです。いま私たちの周辺で、教育が、家庭科が大きく変わろうとしています。変える主役はやはり私たち、と思いませんか。

◆福井莞（Dv荒井）

日本家庭科教育学会

第十五期中央教育審議会へ、意見書提出

日本家庭科教育学会は、会長内藤道子氏の名で中央教育審議会会長および審議会委員に二回目の意見書を出した。答申の出る前の四月であった。「家庭科（教育）こ

知 り た い ・ 知 ら せ た い

そ『共に生きる力』を育てます!!」とのタイトルで、五年秋に同会が全国九地区四七都道府県の高校の家庭科の教師と高校生対象の感想文調査の結果を踏まえて出された。

また「審議のまとめ」が出された六月、同学会は直ちに文部省ホームページにて全文入手し、六月三〇日付で、意見書を提出した。要点は、(1) 将来の教科構想に関しては、①総合的学習は、家庭科など既設の教科教育の中で推進されてきている故、教科を離れたところでの学習時間特設の意義は認められない。②学習内容厳選の例としての小・中の被服製作は、学習過程の中で体を使うことの今日的意義と学びを確かにする方法として有意義であり、受験競争・偏差値教育の排除など抜本的な教育改革が並行して講じられてこそ実りがある。③本学会による家庭科基本調査にみられるように学習環境、とくに家庭科教員配置の貧困状況の改善にむけて強力な推進を願う。(2) これからの家庭教育や地域社会教育の在り方に関連して、①家庭と地域社会の連携ネットワークに学校教育による支援は当分の間必要。②九四年の「国際家族年」が一年では不十分であり、「日本家族の十年」を提唱したい、というもの。



『心の地図』 — 私の場所を求めて

尾崎豊と中島みゆきの世界から(2)

金沢中央高校
寺島 紘子

「みんないっしょ」でない学校で

現在私が勤務する定時制高校は、全日制高校から排除されて入ってくる生徒が多くなっている。これは、現行の全日制の「カリキュラム」の無理が拡大してきた結果の現象ではないのか。「みんないっしょ」の地図はもういらない。この際、別の地図を考えてみよう。必修修科目をなくし、学年制もやめ、単位制にする。同一学年で同一内容を同一進度で学ぶ、そのまとまりとしてのクラス、そういう縛りをなくすのだ。三年間で卒業しなくてもいい。単位の互換を認め、中途退学や再入学も転編入学も他校との併修ももっと自由にやれるように流動化する。不登校の生徒には、レポートによる通信添削に切り替える。もちろん指導要領

や教科書検定は廃止する。そして、区別することが格差にもつながるような全日制・定時制・通信制という課程別の名称もとり外すこと。ライフスタイルにあった就学形態は残しても。要するに、いくらでもやり直しがきく地図にするのだ。異質な生徒たちがいて、生徒の都合で多様な学び方ができる学校がベターだ。

しかしこの学校は、一面では、生徒にとって甘い学校ではない。自由な選択の結果の責任は、自分でとる必要があるからだ。それだけに厳しい学校ともいえる。実際的には単位制の私の学校では、欠席時間数が多くて未履修科目を出す生徒や退学してしまう生徒もかなり多い。それでも、自分で納得しながら、挫折しつつ試行錯誤していくことが

できる。これは以前のシステムよりはましだと思ふのだ。

このような、少しだけ「みんないっしょ」でない学校で、「生活文化」4単位を持つている。そしてこの科目を私は次のように考えている。

私たちはさまざまな生活を持ち、人生を歩んでいる。そこではいろんな人と出会ったりかかわったりする。学ぶこと、働くこと、愛すること、育てること、老いること、死ぬこと。こういう諸現象を、私と社会(あなた)との関連でとらえ直してみる。そして、私たちの習慣や観念の自明性を疑ってみる。教材には、映画、音楽などの文化媒体を使って、自分とは異なる生活や文化、生き方と比較する。そうする中で新しいものの見方を知ることができるのではないかと。

今年度の全体のテーマは「私と世界(あなた)に出会うレッスン」。レッスンを「心の地図——私の場所を求めて」とした。地図ということばが、尾崎豊の「十七歳の地図」という曲に、自分の心象風景を表すことばとして出てくることや、中島みゆきの「EAST ASIA」の曲に、「世界の場所を教える地図は 誰でも 自分が真ん中だと言いつける 私のくにをどこかに乗せて地球は くすくす笑いながら回ってゆく」と表現されているところからきている。

心の地図は固定した場所は持たない。二人の旅人の心の地図を探してみたいと思う。

他者との和解(許し合い)を求めた尾崎豊

尾崎豊の死から四年、彼は今も聴き続けられている。それは、彼が自分であることへの違和感に、徹底的にこだわった純粹さ、論理性への共感からではないだろうか。

尾崎は「結局ぼくが知っていたことというのは、なぜぼくは生まれてきたのかということだった」(尾崎豊「墮天使達のレクイエム」角川書店)と述べている。高校生のデビューから二六歳の死までの彼の音楽、詩、小説などが「生きる意味」を考え続けた彼の思索のあとだろう。

尾崎が求めたもの、それは「自由」「愛」「真実」である。彼は、大人や学校や社会が自分を一つの型へはめようとして発揮する力に抵抗する。しかし、「自由」を求めても、一方では、この偽善的な社会に帰属しなければ生きていけない自分の弱さも見つめざるを得ない。社会と自分の不調和という自覚は、女性との「愛」においても見いだされる。尾崎は、一体となる愛にやすらぎを求めようとする。しかし、一体化しない愛、わかりあえない自己と他者、克服しようとしてできない男女のズレに苦しむ。そして「彼

女は僕の、愛という名の迷路だった。僕はその迷路に迷い込み愛に飢え、死んだんだ」（小説『普通の愛』角川文庫）と書く。「愛」の幻想の矛盾を彼は見つめ出しているのである。

「真実」を尾崎はどのように理解するようになったか。社会との同一化を拒否する自分、一体化できない他者がいる。この苦しみ、生きる自分とは何かと考えたとき、どこかに「真実」はあるはずだ。彼はやがて、「神」に他者との和解（許し合い）を見いだす。神によって「真実」が裁かれるのだ。そして、神はすべてを受容し、癒す存在なのだ。その神に、彼は「断崖の絶壁に立つ様に夜空を見上げる今にも吸い込まれてゆきそうな空に叫んでみるんだ。何処へ行くのか 大地に立ち尽くす僕は 何故生まれてきたの」（「永遠の胸」と問いかけ、神に近づきたいと考える。尾崎は「生きる意味」をどのようにつかんだか。何ひとつ確かなものなど見つからなくても 心の弱さに負けないように立ち向かうんだ」「新しく生まれるものよ おまえは間違っていない」（「誕生」）。

これが彼の結論であろう。人間は一人きりの孤独な存在だ。生きる意味がつかめなくて苦しくても、生きることに立ち向かうこと、そういうプロセスの中で考えることに意

味があるのだと。

他者との距離を見つめた中島みゆき

中島みゆきもまた「自分探し」の旅に出た。「私は、私と出逢うために歌っている」（落合真司「中島みゆきデーブック」青弓社）と語っている。尾崎が他者と和解するために「神」を求めたのに対して、中島は他者との和解を考えず、他者との距離（あいだ）を考える。その距離は、互いに埋め合わせることでできない距離である。人間はその距離を自分で引き受けて孤独に生きていくしかない存在だ。そこに自由があると考えたのではないだろうか。

中島は、失恋という設定で、この距離を考えようとする。私が必要とするあなたは、もう私を必要としない。しかし、この失われた愛における絶望的な孤独を覗いてこそ、人は飛び立てるのだ。私は「あなたの望む 素直な女には 最後までなれない」（「かもめはかもめ」と）。

私にとって、愛する主体としての自我だけが、私の残された自由である。「返される愛は無くても」（「I Love him」）、失うものを恐れずに愛するのだ。「君が笑ってくれるなら僕は悪にでもなる」（「空と君のあいだに」）テレビドラマ『家なき子』主題歌）と、私は悪も行使するほどの破壊

力を持つ。そのとき、ひとり孤独な闘いをする君（主人公のすず）を受けとめられる僕（犬のリユウ）になれるのである。

自己と他者の距離をそのままにして恐れぬ、そういう関係において、私はあなたを、あなたは私を、互いの鏡にすることが出来る。私という不確かな存在は、あなたという鏡に、私の姿を映すことでは出来ない。あなたのまなざしを私に取り入れたとき、私は私に出会うことができる。この関係を、中島は「二隻の舟」という曲で二つの舟にたとえる。「おまえとわたしは たとえば二隻の舟 暗い海を渡っていくひとつひとつの舟」である。

「たとえ舳い綱は切れて 嵐に飲まれても きこえてくるよ どんな時も おまえの悲鳴が胸にきこえてくるよ 越えてゆけ と叫ぶ声が ゆくてを照らすよ」だから「ひとつづつの そしてひとつ」の舟なのである。私は、あなたによって支えられ、励まされて、越えていくことができるのだ。

中島は自分が「自分を一番好き」という。動物や、小石や、風になったりして変幻自在に旅をする。「ひとりさすらう旅人にも 愛よ伝われ ここへ帰れと」（「旅人のうた」）。中島には自分という帰る場所があるのだ。

心の地図——私の場所を求めて

自分に帰る場所があるということは、他者と一体化しない距離があつてこそ言える。中島には、固定的なアイデンティティに縛られた不自由さがない。しかし、尾崎は神を求めたことで他者と和解しようとした。和解することは、他者との距離を狭めることである。他者と一体化（同一化）することで、自由を失ってしまう。彼は、ファンの悩みや苦しみを真摯に受けとめた。彼の死が意味するものは、彼に癒しを求めるファンの他者（神）として、ファンの苦惱を一人で背負って癒そうとした不幸だったのではないだろうか。

「みんないっしょ」の地図はいらない。地図はいつだって無効にすることができる。中島は「あてにならない地図を持ち ただ立ちすくんでいる もう風にならないか ねえ 風にならないか」（「風にならないか」）と呼びかける。

私は、自分の心の中を覗いたとき、私の孤独と向き合う授業のなかで、私は、鋭い感性でもって自己と向き合った二人の異なる旅人の精神世界に出会った。そしてその世界を教材とすることで、生徒という他者に出会った。

そのとき、私の中の私に出会ったような気がする。

We 夏期フォーラム97 実行委員会だより

フォーラム実行委員会・北海道

北海道事務局からは会場と全体会に
ついてのみお知らせします。

会場は、旭川市を一望できる丘の上、
大ラブホテル街の中に立つ「パークホ
テル」という超We級(?)の場所。
「百名参加の全国大会だよ」と代理店
に言っておさえました。江口千裕の勤
務する小学校の修学旅行でも利用する
ところで一応オススメ!

全体会は、私の友人紋別市在住の鷲
頭幹夫さんをお願いしました。この方
とにかくいろんなことをやっていて、
今は、農業と塾と地元新聞の企画連載
などをしている元気のいいおっさん!

詳しく知りたい方は『おれは糞を汲む』
(鷲頭幹夫著・径書房)をご一読くだ
さい。「フォーラムどうする?」とい
ろいろ考えたとき千裕と二人で「全体
会は鷲頭さん!」と話す前からここだ
けは一致していました。

道内で実行委員募集中です。がんば
ります。(江口凡太郎・江口千裕)

フォーラム実行委員会・関西

北海道まで持っていける分科会はさ
て……。Weの会・関西では札幌に夫
婦別性を考える会もあることから、そ
れに関連したものや、神戸フォーラム
でお呼びした羊毛紡ぎの本出さんの関
係で肉食として羊とつきあっている人
の話も……。どんだん広がっていくけれ
ど、できそうな分科会は挙げてみるだ
け挙げて、消していけばいいじゃない
しよせん、集まった人で勝手に分科会
を創るのがフォーラムの醍醐味なのだ

から、という話に落ち着きました。
今回は十一月九日、十四時、ドーン
センターです。(中村英之)

フォーラム実行委員会・関東

十月十日に関東地区実行委員会をも
ちました。全体会講師は、江口さん推
薦の鷲頭幹夫さんに満場一致で賛成。

子ども会活動は、来年は子ども的人数
に予め定員(十名前後)を設け、当日
実行委員の中からも交替で担当者をつ
けるようにしては……という意見が出
ました。

今回は十一月三〇日(土)一四時
東京ウィメンズプラザードホールです。
どなたでもお気軽に参加して下さい!
お問合せは事務局加藤(0429・71・0869
夜間)まで。

なおWe 大忘年会を実行委員会の後
(十七時三〇分)渋谷にて開催予定。
詳しくは三澤(0474・86・9610夜間)まで

蔦森樹の巡業日記



⑦

蔦森樹

タツル

前々から気になっていた、CAPの「性的虐待のカウンセリングを学ぶカナダ研修報告会」に参加しました。

最近の私の講演でも、性的虐待を受けた記憶を勇気を出して語る女性が確実に増えていて、実際には世の中サバイバーだらけだと感じています。

会話は和やかでしたが、メンバーの言葉が深く、また私自身気がつくことだらけという感じで、なかでも暴行を、セクシアルアビューズ（身体への性的虐待）とセクシアルティアーアビューズ（男・女・同性愛ということでの差別）に分けて説明があったときには、明快すぎて不覚にもポロッと涙が出ました。私はこの後者に動じないように努力して、近年心の「ボケ」が巧くなったのだけれど、そんな自分を褒めながらも悲しいという複雑極まる心持ちにその時なつたのです。

そして、これは本当に共感したのですが、「Working With」というカナダの女性カウンセラーの方

法がすばらしい。日本では、例えば私の場合どうなるのだろうと秘かに想像すると、「女装癖の問題がある」性別自己同一性障害を持つクライアントの「ケース」とされてしまう相談が、「三八歳の彼（クライアント）」と私（カウンセラー）は、〈装い〉の問題に取り組んでいます」となる。これは前者とは似て非なるもの、一八〇度方向が違います。前者だと重い病氣くさくてヤダけど、「Working With」はお互いに気がついてゆくプロセスのなかに、二人の「仕事」があるというのです。治す者／治される者ではなく、仕事に取り組むふたり。私はこれがぴんとくる。どっちがいいかといえば、やっぱりこっち。蔦森の場合は、同じ受けるなら絶対に明るい方がいい。胸張って行ける気がするものね。

他にセラピストが被る二次的トラウマへのフォロー（大切だ！）も報告されていたけど、これはまたの機会に。

セックスレスなわたし

海野 俊之

今回妻からセックスレスについて、一二〇〇字前後の原稿を書いてほしいと依頼された。それも自分たちのことについてとのこと。軽くOKの返事してみたものの、複雑な心境である。我々夫婦のことを人様に語るのは如何なるものか、単なるワイドショーのネタにならないか。妻に言わせれば、誰もが読んで面白いワイドショーネタでよいとのこと、ならば、私が今思っている、妻に対しての愚痴でも人様に聞いてもらうことにしましょう。先日、これを書くにあたって、妻が前回のこのコーナーで書いた原稿を読ませてもらった。三年前の浮気の事や、義理のセックスはしないなど、私にとってはかなりキツイことが書かれていた。

夫の言い分——彼女自身があまりセックスが好きではなかった。結婚する前の三年間は、月三回位でしていた覚えがある。男としても、そう毎日会うことが出来ないのであるから、会えば積極的にセックスを求めるものである。しかし、結婚してからは、彼女自身で仕事で疲れたなどと言い、セックスを拒否することが多かった。私としても、そう言われれば今日はいいかと思う。毎日同じ家に居るのだから明日もあるか、などと思う。そんな日々が続く、彼女とのセックスは月に一度もすれば良いほうになってしまった。そして、その「月に一度」も無くなってしまったのである。

二人の子どもにしても、妻が私の浮気を心配になり、子どもを産もうと、久々にした結果である。要するに一回したら出来てしまったのである。子どもが出来れば出来たで、家では愚痴ばかり。家で妻と話をすること自体がいやになってしまったのが、子どもが出来

リレーエッセイ⑦

たころである。二人目の子供が出来たと聞いたときには、嬉しさの反面、また彼女のヒステリックな愚痴を家で聞かなければいけないのかと嫌気がさした。

浮気については、妻に大変辛い思いをさせてすまない気持ちである。女性から見れば男の身勝手と思うだろうが、男というものは精神的にはなく、肉体的に女性を求めてしまうのである。これを読まれる中には結婚されてる女性の方も多いいと思いますが、あなたがたのご亭主のほとんどが、気持ちの中に浮気願望を持っていることでしょう。よほど夫婦生活に満足していれば別ですが。妻は最近、私のことを、夫ではなく友だちのような関係だと言う。

彼女は決して三年前の浮気を許そうとしない。彼女の嫉妬深さは昔からであるが、かなり私を憎んでいるようである。いずれは別居、離婚ということになるであろう。しかし、彼女をここまで強くした

のは、最近の友人関係のようである。例えば、この本を出版している方々や、彼女が所属している女性のネットワークなどである。彼女に今のような友人が出来なければ、少しは私とやり直す気持ちを持つてくれたのではないかと思う。まあ、こんな事を書く、かなりの女性から勝手な男だと思われることでしょう。最後に、赤の他人の女性と男性が、一生一緒に生活を続けていくのは、奇跡に近いことではないか。どんな夫婦であっても最後は妥協により生活を続けていくのである。妥協が出来ない夫婦は結局、離婚ということになる。日本以上に欧米で離婚が多いのは、妥協が出来ない夫婦が多いからであろう。そして、彼女はきっと妥協出来ないであろう。

違いがわかる クオリーミーな相談室

坤 恵依子

ある日、瞑想用のCDを探していたら、体質別のCDなるものに出会った。自分の体質にあった音楽をというわけである。CDのカバーに自分の体質を見分けるための特徴が書いてあり、それは、3種類あった。ヴァータ体質、ピツタ体質、カパ（カバではありません。けど、後で分かりますが、イメージとしては近いです）体質。これは、アーユルヴェーダの分類によるとありました。とりあえず、食べても太らないとか、疲れやすいなどという、3種の中で一番自分に近いと思われるヴァータ向きのCDを買ってみました。これがなかなかいいのです。

事務所を持って行って、BGMとしてかけていたら、仲間が「何？ その音楽、いいじゃない」という。実はね……と買った経緯を話すと、他のタイプのもも聴いてみた

いから買ってきてよという。そこでまた出掛けて行ったのです。身が軽いのもヴァータの特徴。CDのタイトルは、『地』『風』『火』などというもので、こういうのを見せようと、アーユルヴェーダというものを知りたくなってしまう。そういえば、何年か前にそんな本を買ったことがあるのを思い出しました。そこでホコリを被っていた本を引っ張り出してきました。『クオンタム・ヘルス』（デューバック・チョプラ著 春秋社）。この連載を始めるときは、予定に入っていませんでしたが、読み出したら面白いので紹介することにしました。気が変わりやすいというのも、ヴァータ体質の特徴だそうです。中国の次は、インドです。

アーユルヴェーダというのは、インドの伝統医学のこと

で、本の帯には、「インド伝統医学と現代医学を統合した
治療・健康法を初めて全面公開」とあります。著者はイン
ド人でインドと米国で医学を学び、内分泌学を専門とする
医学博士です。

アーユルヴェーダの考え方は、医者が患者を診るとき、
患者がどんな病気に罹っているかではなく、患者はどんな
人か、どんな体質の人かということを問題にします。体質
とは、私たちの体に組み込まれた生来の傾向のことで、医
者は患者の体質を見分けることが第一の仕事で、その患者
にとってどんな食事や運動や治療が効果があるのかを知っ
て処方するのです。

コップ一杯のミルクの成分は同じでも、ある人はそれを
殆ど脂肪に変え、ある人はその大部分をエネルギーに変え
ます。だから、この病気にはこの薬というのは、あまり合
理的ではないのです。漢方でも、体質を考えた処方をする
ますが、アーユルヴェーダはさらにその上をいく感じ です。

CDに話を戻しますと、全部のCDを試してみただけで
はないのですが、ヴァータ体質向きの音楽は、メロディッ
クで、柔らかい感じ。同じ旋律が続いてちょっと飽きたな
と思うころ、別の旋律に変化します。

ピッタ体質向きの曲は、軽音楽という感じ。カパ体質向
きの曲は、どっしりとした感じであまり変化がないように

感じます。

少しそれぞれの体質の特徴をあげてみましょう。

A. ヴァータ体質 軽く細い体格。動作がすばやい。空腹
と消化が不規則。浅くとだえがちな睡眠。興奮しやすい。

熱中、快活、想像力。気分が変わりやすい。新しいことを
覚えるのが速いが、忘れるのも速い。悩みが多い。疲れや
すい。がんばりすぎる傾向。生活習慣が不規則。

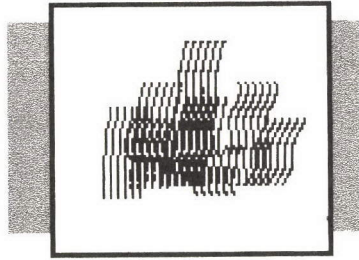
B. ピッタ体質 中程度の体格。中程度の力と持久力。強
い空腹感と喉の渇き（食事を抜かせない、夜中に喉が渇い
て水を飲むような人）。強い消化力。ストレスを受けると
怒りや苛立ちの傾向。時間を無駄にするのを嫌う。いろい
ろな場面で指揮をとる。時々、厳しすぎる、皮肉である、
批判的であると人に言われる。確固とした足取りで歩くな
ど。

C. カパ体質 頑丈で力強い体格。優れた体力と持久力。
安定したエネルギー。ゆっくりした優雅な動作。おだやか
でくつろいだ性格。すぐ怒らない。決断する前に長い間じ
っくり考える。朝、目覚めるのが遅い。起きてからもコー
ヒーが必要。現状に満足している。本当に人の身になって
考え、他人の気持ちを尊重する。食事に心の満足を求める。
肥満の傾向など。

さて、あなたはどのタイプでしょうか。（続く）

神戸から⑦

神戸YWCA救援センター
前田圭子



初秋は夕暮れが早い。あたりに暗闇がせまるころ、訪問したお宅では猫の夕食の時間だった。七、八匹の猫たちが我先にと餌のボールに群がる。餌をやるのは高校生の娘さんの役割。かなり涼しくなってきたのに蚊がふわふわと狙ってくる。でも、大丈夫。公園のテントを訪ねる時はいつも長袖、長ズ

ボンで完全防備している。

ここまで読んで方はこれは去年の秋の話だろうと思うだろう。いいえ、これはつい十日前のこと。Sさんは中学、高校生の子どもも含めた家族五人でこの公園に避難している。全壊した自宅や転校をいやがる子どもたちのことを思い、この公園に居続けた。日中、仕事で不在の時に、市の土木課の職員が現れ、中学生の娘さんが「いつまで居るのか？」と問われたこともあったという。しかし、Sさんは勝った。近隣の人々と専門家の協力を得て、地主を説得して、共同住宅の建設に取りかかったのだ。人々はがんばって地元に残続けたSさんを信頼した。何度となく開かれた会議、役所や建設業者との打ち合わせ、Sさんはその記録をノートに克明に記録している。

Sさんの連れ合いは、愛猫をなでな

がら語った。「子どもたちは、お父ちゃんに一度も聞いたことがなかったんですよ。『いつまでここにおらなあかんの』って。みんな、お父ちゃんの手してること信じててん。」

地元に残っていたからこそ、共同住宅は実現したのだとSさんは言い切った。仮設住宅に入ってばらばらになっってしまったいたら、核になる人がいなければ、まとまる話もまとまらない。

恒久公営住宅の一元化募集が夏に行われ、その抽選結果が発表となった。

遠隔地の仮設住宅にいる知人から電話がかかってきた。「うちの仮設、四五

〇人ぐらい居るけど、どうやら当たった人、二、三世帯だけみたい。年寄りも車イスの人も優先や言われてたけど、誰も当たってへんねん」。発表があったら、ほぼ一ヵ月、知り合いで当たったという人を私はひとりも知らない。



Jami

居場所考② 〈老人の居場所、老人の欲望〉……………水田宗子

定年退職という言葉が表しているように、人は社会の生産システムから除外されて社会的に〈老人〉になる。最近、いろいろな大学で、定年を引き下げたり、一定の年齢以降は給与を低くしたり、これまで慣例化してきた定年延長措置を廃止するところが増えている。定年を過ぎても教えたい人は、ボランティアの気持ちで電車賃とお弁当代くらいでどうぞ、というところもあるようだ。

退職という、生産システムからの撤退が、個人差がある年齢や加齢の度合いや、働く意欲、能力を無視して、それ以降の労働をボランティアと位置づけることで、人を社会的に老人と定義するわけだ。こうして〈老人〉は、主婦労働と同じように、働いてもその労働はGNPに算入されないシャドウワークとなる。

最近はまだ、消費者としての老人、という見方もあちこちで行われている。高齢者は生



Jami

産システムからは撤退するが、消費者としては一定のパワーを持ちつづける。退職金が支払われ、国や企業が年金を支給する安定した社会機構の中では、高齢化社会になればなるほど、老人の消費力は経済・流通活動にとつて重要になる。介護や保護が必要となった高齢者でさえ、介護医療の消費者としての位置づけは変わらない。その消費者としての経済力を肯定的に評価して、福祉、介護産業を興隆させ、経済的にも関連な福祉社会を実現しよう、という論議である。高齢者は介護・保護対象という消費者なのである。

これらの論議にはつきりしているのは、高齢者は生産活動にはじやまだし、寝たきりになつたりしたら大変な負担だという老人排除に反論して、働けるあいだはその労働をボランティアとして活用し、年金収入など（老人の消費力）を経済活性化のファクターとして位置づけ、寝たきりになつたとしても介護・保護対象として、介護産業の消費者になつてもらおうということで、高齢者を経済社会の有機的な一員として取り込もうという姿勢である。

これによれば、年をとつてベッドに寝ているようになって、もつとよい看護人を、看護用品を、看護環境をと欲望する消費者として、いきいきと消費し、経済の活性化の一端を担おうということであり、社会はまた高齢者をそのように遇する、つまり、そのような居場所を用意しなさいということである。

高齢者にいつまでも（いきいき）としてもらいたいのは、誰でもが望むことだ。しかし、はたしてすべての高齢者が、（生涯現役）と、いつまでも社会の中で（いきいき）としていたのだろうか。老人の欲望とは、そのようにいつまでも社会の生産・消費機構の中で（いきいき）しつづけることであろうか。私には、そんなに一律なものではないように思えるのだが。



Tamu

増田みず子の短編に、『一人暮らし』というのがある。戦争から病んで帰った夫を介護して、その死までを看取り、その後も一人息子を女手ひとつで育て上げた主人公は、結婚した息子の家族と同居している。彼女は、夫婦で働きたいので子供の世話を頼むという息子たちの頼みをすげなく断り、孫を寄せつけず、孫もお祖母ちゃんには寄りつかない。やがて息子家族は主人公の留守の間に引越してしまい、居所も知らせてこない。同じ団地に住む女性が、腰を痛めて寝たきりになりそうな主人公の世話をやこうとするが、わたしは一人暮らしからと、主人公はその女性も追い返してしまう。

家族という関係からも、社会からも離れて、一人だけの時間と人生を生きたいという、老いたこの主人公の〈欲望〉は、家族に病み、家族の絆や社会福祉の偽善に疲れて心を閉ざした〈主婦〉の、老後への主体的な希求として、心うつものがある。

ヘミングウェイの『老人と海』の主人公もまた、かたくなに陸—社会を離れ、孤独な海で巨魚を追う老人である。その孤高ともいえる姿に世代を越えて多くの読者が惹かれ、さまざまなものをその中に読みとってきたのも、社会の中で生きることから得る生の意味とは異なったものに向かいあいたいという、ひとが生きる上で持っている潜在的な欲望をそこに見るからではないだろうか。

最晩年の日に妻からも家族からも逃れようとした、老いたる家出人トルストイに私たちが共感するのも同じ気持ちからである。羽田澄子さんのドキュメンタリー（『痴呆性老人の世界』『安心して老いるために』）の中で、互いに世話をしあったり、交流しあう若い人たちの傍らで、それに加わらず、黙ってじっと座っている孤独な老人の姿に、荒涼たるものばかりを見るのは、老人の内面や欲望を、生産と消費の座標視座でしか測ることができない、エコノミックアニマルの目と変わらないのではなからうか。

◆セックスレスに男性筆者現れる。ナンカワカルナーと「こういう本を作っている一人の身」でありながら、共感？ いや同情を禁じ得ない？ 気分で見ました。フェミックスにおいては優れて一般庶民感情の持ち主であると自負している私（現実的と言い換えられますが）としましては、「はあー」って困惑を隠さず書く率直さとそんな関係が新鮮。楽しげに「きき水」をしている「授業風景」の少年たちもこの運命から逃れられないぞと版下制作しながらニヤニヤ。（吉田）

♥手荒れがまたまた悪化。医者に行ったらアトピーだって。襲ってくる痒みにたえながらの家事。子供達は大変なことを察して、「お皿洗って」と言えばきれいにしてくれる。ところが夫は10時頃帰ってきて食事をした後、「平日はお皿洗わないからね」……「平日はお皿汚れないの？」「遅くなるなら外で食べてよ！」と心で叫んでる私。んー、家計の一助を担っていないゆえのこの弱気。私が外で働くようになった暁には、きっと夫と同じセリフを言ってる。（山下）

♥「いいんですか、暴力のことこんなに書いて。Weの読者は拒否反応ないですか」と心配してくださった方がいるけど、私にとっては一番核にあるテーマ。各地で居場所を作っている方たちに原稿をよせて頂いてうれしかった。ウィメンズネット・こうべの編集した『女たちが語る阪神大震災』（木馬書館）には報道されなかったたくさんの女性たちの声ののっています。この頃、何かと自信を失いがちな私ですが、皆さん如何お過ごしですか。「We」の感想などお聞かせ下さい。（中村）

♣レイプや痴漢、夫婦間の暴力など、受ける側の気持ちは、男性にはなかなか分かってもらえない。従軍慰安婦の問題もわかり。女は気持ちを話すのに、男は論理でくる。自分の娘や妻には想像力が働いても他人には働かないというのは、何なんだ！ 女は自分より他者の気持ちを優先し他者の感情に敏感すぎる、それを変えていこうというのがフェミニスト・セラピーだけど、それがあからこそ女は他者の痛みが分かるのです。男も同じようなら問題はないのです。（河村）

★編集後記をおもしろがって読んでくれる人と、まじめにやる気があるのか！とガックリする人と二通りいらっしやるそうです（後者の声を聞いた後なので、今月はみんな自粛気味でおとなしいのですが）。私などは、やっと終わったあとに解放感と共にぶち壊しにしたい思いに駆られ、まじめに書けなくなる。それと、それぞれが脈絡なく勝手なこと書くのは、みんなが勝手な方向を向いている我が「わがまま集団」の日常の反映なんですね。★フェミックスでは「女性福祉法」を考える会の会報も制作請負しています。性暴力や売春の問題を継続して考えていきたい方、ぜひご購入ください。5号には売春をめぐる最前線の問題提起がされた先日のシンポジウムの記録が掲載されています。★特集テーマがどんどん変わってごめんなさい!! その時々々の旬の話題をと思うと、つつい気も変わり……次号は「ク感じることクから出発する人権教育」です。★2月に「女も男も共に性暴力を語ろう」という集いを企画しています。（稲邑）

くらしと教育をつなぐWe 〒154 東京都世田谷区池尻3-2-3サンエイグランドハイブ703

Vol. 5 No. 7 1996年11月1日発行

TEL/FAX 03-3424-3603

定価600円（本体583円）

郵便振替 00130-7-754314（有）フェミックス

年間購読料/定価6800円（送料共）

富士銀行 池尻大橋支店 〒1501277

発行/フェミックス 編集/稲邑恭子 河村ふみ 中村泰子 印刷/（有）イー・エム・ピー 1代田区魚沼橋2-5-2

※本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

こだわり出版物の情報満載・生活・文化情報誌 月刊ほんコミニケート

■月刊ほんコミニケートは、私たちの新しい社会・生活(オルタナティブ・ライフ)のあり方をともに「考え」「つくる」ための情報誌です。エコロジー、教育、人権など幅広いテーマを、あまり時勢に流されずに取りあげていきます。

■ブック(特に少部数出版物や自主出版物)情報満載。紹介した本は通信販売等で、全国どこからでも入手できます。

●B5判/24~32ページ/1部400~500円・年間購読料 4800円

●見本誌送呈します●

定期購読・目録の購入は
ほんコミニケート編集室へ

〒169 東京都新宿区百人町1-15-24

OSセンター210号

TEL 03-3368-4160

郵便振替 東京 00110-2-398142

ほんコミぐりーんぶっくす'96

●ブック情報&お店・グッズ紹介●

私たちの生活に直結した“ぐりーん”関連の本約500冊を、30ジャンルに分類、解説を交えてリストアップ。

■B5判/80頁/800円+税(80円切手12枚)

女たちの情報紙

ふえみん

f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。〈月3回発行〉

【申し込み先】 婦人民主クラブ 1ヵ月 750円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244.3238

大阪府北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

ア
ジ
ア
・
た
べ
も
の
・
せ
つ
け
ん
・
げ
ん
ぱ
つ
お
ん
な
・
は
た
ら
く
・
が
っ
こ
う
創刊50年をすぎた女たちの新聞



くらしと教育をつなぐWe 1996年11月1日発行 第5巻第7号
定価600円(本体583円 年間購読6800円送料共)
郵便振替 00130-7-754314 フェミックス